読書科学

第18巻 第3号（通巻 第69号） 昭和49年12月30日 発行（季刊）

「正ちゃん」と「ズク小僧」 阪本 一郎
子どもの読書態度の分析 増田 信一
小学生における人間の相互感情理解の発達 松原 俊一
常習交通違反少年の読書療法 大神 貞男

69

日本読書学会

◇本　号　目　次◇

原　著

『正ちゃん』と『ズク小僧』
わが国初期の新聞連載子ども漫画　立正学園女子短期大学　阪本一郎　59

子どもの読書態度の分析
——中学一年生が想起する自己の読書歴による——
東京学芸大学附属大泉中学校　増田信一　69

小学生における人間の相互感情理解の発達
——「はだかの王様」の感想文の分析——
東京都港区立港南小学校　松原俊一　76

知能障害を伴なった常習交通違反少年の読書療法的接近について
——読書療法の症例研究 No. 15——　千葉家庭裁判所　大神貞男　86

会　報　92

日本読書学会役員（昭和49年4月1日～昭和51年3月31日）

会　長（理事長）　倉沢　栄吉
副会長（副理事長）　望月　久貴
常任理事　出雲路　猛　岡本　奎六　阪本　敬彦　滑川　道夫
福沢　周亮　増田　信一　室伏　武

理　事　今村　秀夫　大神　貞男　大村　はま　岡田　明
尾原　淳夫　輿水　実　佐藤　泰正　野地　潤家
深川　恒喜　椋　鳩十　村石　昭三
監　事　平沢　薫　山本　晴雄

編集委員　阪本　敬彦　高木　和子　増田　信一　室伏　武
John Downing　Donald Leton

『正ちゃん』と『ズク小僧』

わが国初期の新聞連載子ども漫画*

立正学園女子短期大学

阪本一郎**

I はしがき

わが国での子ども漫画は1920(大正9)年頃にさかんになったようである。それより前は単発の漫画やポンチ絵が子ども雑誌に掲載されていた。また『日本少年』が「少年ポンチ特集号」を出したのが大正6年である。それに北沢楽天が『時事漫画』を新聞紙型の色刷4ページで出し始めたのも，岡本一平が『朝日新聞』の紙上に『人の一生』を連載し始めたのも，大正10年のことであった。子ども物では，宮尾しげをの『漫画太郎』が『東京毎夕新聞』に載ったのが大正12年，その年関東大震災があって，同紙に『団子串助漫遊記』を連載し始めていた。

これとほとんど同時に，『アサヒグラフ』に織田・東風人の共著『正ちゃんの冒険』の連載が始まり，次いで大正13年には，長崎抜天の『ひとり娘のひね子さん』が『時事新報』に載り始め，また『報知新聞』に麻生豊の『ノンキナ父サン』が始まったのも同年である。さらに大正14年には『毎日新聞』に巌谷・帰一の合作『ズク小僧一代記』の連載が始まった。

こんなふうに新聞社がこぞって漫画にスペースを与え始めたことが，今日の花盛りを招来した原因であった。これと似たようなことが，アメリカの新聞業者の間に4半世紀前に起こっている。それはピュリッツアー(Pulitzer, J. 1847—1911)とハースト(Hearst, W. R. 1863～1951)の新聞戦争たけなわのときで，前者の発行している『ワールド』紙と，後者の発行している『ジャーナル』紙とが，同じ主題の漫画『イエロー・キッド』を敵対紙でありながら，一時共有していた事実からも知られる。好評の漫画は新聞の販売を左右する重要な因子であることが，一般に認められていたのである。

II 『正チャンの冒険』の作者

『正チャン』の生みの親は，『アサヒグラフ』(大正12年1月創刊)の編集長・鈴木文史朗で，彼は早くからアメリカの新聞に連載されている comic strips に目を付け，同誌の発刊と同時にマクマナスの『親爺教育』(Bringing up Father, 1912)を買って載せはじめた。これがわが国に外国の連続漫画を輸入するきっかけになって，他紙もこれを競うようになり，洋風のストーリ漫画の技法(とくに吹出し)が，日本にも吸収されるにいたる。

『正ちゃん』のアイデアは，当時ロンドンの新聞『ミラー』に載っていたペンギン鳥を中心にした連続漫画だという。(『文史朗文集』)そのペンギンをリスに置き換え，これに正(しょう)ちゃんという少年を配した。初期の構想は鈴木自身が作り，後に局員の織田小星(本名信恒)に書かせた。やはり創刊号から連載している。

これまでの漫画は，絵も文も自作したものであったが，ここでは画家に樺島勝一(1886～1965)を起用した。樺島は

---

* Two early Japanese children's newspaper comic strips : "Sho-chan" and "Zuku Kozo."

** SAKAMOTO, Ichiro (Rissho Gakuen Women's Junior College)

独学の挿絵画家で，ペン画もしくは白黒の濃淡で，写真のような刻明で写実的な絵を描いていた。その異色な画風が買われたのであろう。しかし『正チャン』では，かなり図案化した略画になっている。その相違をカバーするためか，「東風人」と名乗っている。(小星は支那語で妾の意味なので，彼はコチノヒトとしゃれたのだとの逸話もある。)

関東大震災の直後，11月から『朝日新聞』に連載されるようになった。この時から「正ちゃん帽」をかぶり出す。(正ちゃん帽とは，毛糸の帽子のてっぺんに丸い玉を付けたスキー帽。今までの正ちゃんは学生帽だったが，この時からはいつもその帽子をかぶり，それが子どもの間に流行したというほどの人気であった。)それから約2年半続いた。並行して『毎夕新聞』に掲載された『団子串助』とともに，日刊新聞に児童漫画のスペースを確保し，ジャーナリズムに子どもを吸収したことは，社会学の上でも意義深いことであった。(注5)

私が入手し得たのは，これらが単行本になったもの5冊(注1)と，戦後のリバイバル版1冊(注2)とである。後者は樺島の本領とする密画に描き改めたものである。これらを資料として考察してみる。

Ⅲ 『正チャン』のストーリ

『正チャン』のストーリはすべてメルヘンふうで，ことさらなユーモアをねらったものはごく少ない。正ちゃんはある日ぶらりと山へ行く。たまたま倒木に尻尾を挟まれて鳴いていたリスを見付けて，助けてやる。リスはお礼に正ちゃんをおもしろい所に案内する——というのが，正ちゃんとリスの出あいで，このあとリスはいつも正ちゃんの従者（狂言まわし）としてついてまわるのである。

二人はいつもふらりとどこかへ出かける。すると，何かの事件が待っている。好奇心と義侠心とで二人はその渦中に巻きこまれ，めでたく事件を解決する。正ちゃんの冒険の動機はみなこのように受動的である。

ところで5巻まで20編の物語を大別すると，次の4種になる。

(1) 昔話ふうの想像の世界にスリルのある冒険を仕組んだもの——9編。
(2) とくに怪奇・恐怖のスリルを強調したミステリー仕立てのもの——7編。
(3) 現実の世界での失敗談——2編。
(4) 因果応報談——2編。

しかし個々の話根を分析すると，みな出典を持っている。講談ダネでは，人身御供の怪獣退治，禁断の狩をした孝子，悪魔につかれた城主の乱行など。日本昔話ダネでは，羽衣を亡くした天女と浦島，天狗と霊泉の縁起など。西洋の伝説ダネでは，半人半馬の女人国侵略，覆面の騎士の戦功など。西洋の昔話ダネでは，巨人の留守の御馳走，みにくいアヒルの子，白雪姫の金を掘る7人の小人，アラジンのランプと三つの願いなど。ネタは古今東西に渡り，それがうまく寄木細工になっている。羽衣を亡くした天女を飛行機で送り，みやげに貰った玉手箱は無線電話機で，帰ってからもお姫様と話ができるとか，屑屋になって見付けた魔法のボタンをひねるとアラビア人が現れて，三つの願いをかなえるとか，あちらこちらの名産を集めて，調和のあるお子様弁当を提供するあたり，その取合せがうまいので，子どもの嗜好に合ったのであろう。創作というよりは，合成である。すでに知っているネタを正ちゃんがどう使いこなすかが，子どもの興味を引いたのであろう。

全体としての構成に独創味があるのは，『春の歌』(これは全体が七五調になっている)『森の秋』などに見られる自然美との融合であろう。この2編はいずれも季節の自然美をテーマとした幻想として描かれ，詩情があふれている。

また主人公を英雄に見立てるこの類のストーリでは珍しい殉教者型の空想が描かれているのも特色である。『露営の夢』では，連隊長としての責任を取って自決をする。『正チャンの芝居』では，孝子の身代りとなって進んで銃殺される。むろん，劇中劇だったとの救いがあるのだが，これは日本人の悲劇好みの現れとも言えようか。

この他にも『ハーモニカ』のように，蚊の生涯を描いて生命のはかなさを憐れむものがある。そういえば一連の物語の底に流れるものは，宗教思想であるようだ。『姫の行方』では，姫の救出に助力した牛が山賊の落した岩に当って死ぬ。道ばたの花を供えて弔ってやる。そのあと筏もろとも滝壺に落ちるが，虹の橋に乗って助かり，雲に乗った牛が来て城まで連れていってくれる。『リスの母』では介抱してやったコンドルが脱出を助ける動物報恩談が混る。『天狗』では，尼僧が霊泉を教えて消え去る。『江の島』では弁天が現れて宝珠を授けて雲の中に消える。『白い烏』では，奥方の信仰する神の使の白い烏が悪魔を退散させる。そして『めぐる因果』とくる。神仏の奇蹟がしばしば起り，またその化身が出没するのである。

当時として和洋折衷の新鮮味を盛りながら調味料はやはり日本の醤油と味噌なのであった。なお，宇宙の怪物と戦う『蓬来山』に，現代の宇宙ものの原型があるように見えることを付記しておこう。

戦後のリバイバル版は，書き直されたストーリがあまりにも教訓的で感心しない。その表紙には「絵ものがたり」と書いてある。

Ⅳ 『正チャン』の弱点

われわれは『正チャン』を漫画と呼んできたが，実は漫画ではなかった。表紙には『お伽（とぎ）・正チャンの冒険』とちゃんと断ってある。もっとていねいに言えば「おとぎ絵話」とでも言えばより適切だったろうと思われる。つまり漫画と称するには，このスタッフはいささかの抵抗を感じたようである。しかし，この種の作品には，後継者が現れなかった。この後の作品はみんな漫画と称するようになったのである。いわゆる「ポンチ絵」から「漫画」に転換する時期にあたっていたから，『正チャン』をも漫画の類に入れて扱うのが常識であった。

もう一つは，「おとぎばなし」という名称はすたれて，「童話」とよぶことが流行してきた理由も考えられる。それは『赤い鳥』運動とも関連があるし，ラジオが普及して「おとぎのおじさん」が「童話家」になったなどのことも考えられよう。

さて『正チャン』は，1回4コマずつ連載されるが，ナレーションと吹出しとの併用形式を採ったことにも問題がある。1編は6回（24コマ）から18回（72コマ）にわたって連載され，題目が変わるごとに，それを表す主題が付く。ところで，ナレーションは1コマについて25～30字の長さで，すべてカタカナの分かち書き（正の字の他は漢字を使わない）だから，内容はごく単純である。そして吹出しの中には，やはりカタカナで平均12字を書きこんでいる。ちなみに吹出しは後には風船玉のような円形になるが，ここでは波線で囲まれた四角形である。

ところがナレーションの筆者は，この絵の構成を，ひとりで物語っている。

①（ナレーション）**フタリ**ガ　アル**ヤマ**ニ　サシカカルト**ヒ**ハ**トップリ**ト　クレタ

（絵）正チャンとリスが坂道を登る。むこうは入り日。

（吹出し）ヒガクレカカッテキタナ

②（ナレーション）クライ**ミチ**ヲ**タドリナガラ**ユクト**ハルカ**ムカフニ**ヒ**ガ　ミエル

（絵）林間の暗い道で二人は立止まる。

（吹出し）オヤムカフニアカリガミエル

③（ナレーション）**ダンダン**チカヅイテ　ミルト**ソレハ**ケンノ**ウチ**デ　アッタ

（絵）二人は小さなあばら屋に近付く。

（吹出しなし）

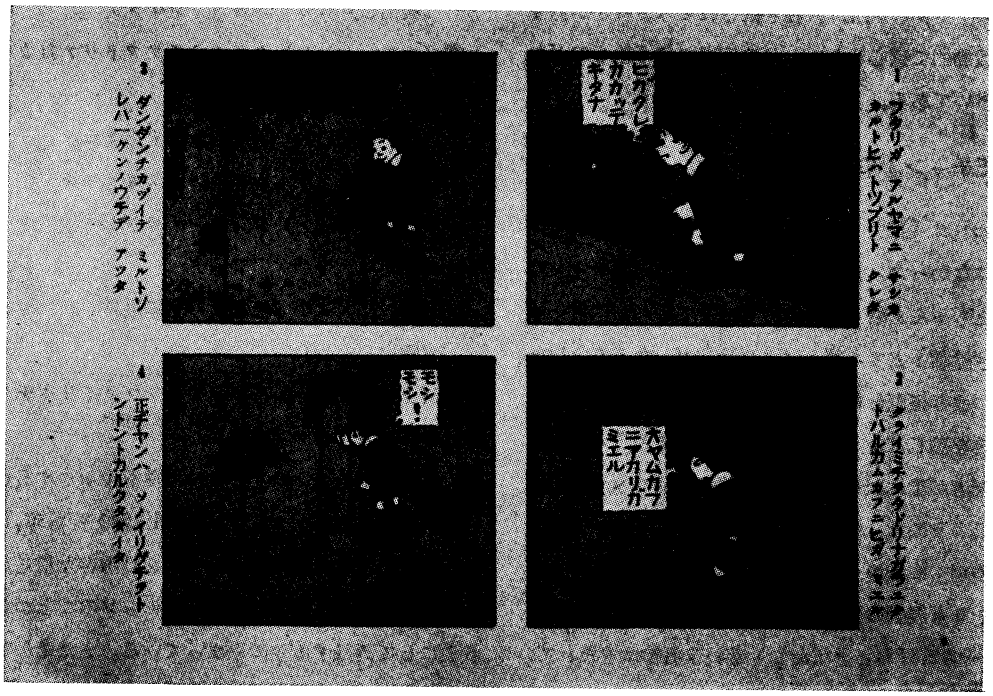
④（ナレーション）正**チャン**ハ　ソノ**イリグチ**ヲ**トントン**ト**カルク**タタイタ

（絵）正チャンはその入口の戸をノックする。

（吹出し）モシモシ！（『山猫退治』の冒頭。）

このように，絵はそのナレーションの内容を視覚化しているのであるが，吹出しはナレーションのことばを直接叙法にして再録するのに止まっている。また僅かのナレーションを絵にするだけだから，絵とナレーションとは即しすぎていて，読者は同じことを二度読まされる。だ

『正チャン』の表紙



『正チャン』の内容の一例

からこの作品はナレーションと絵，もしくは絵と吹出しだけを読めば，ストーリは大体理解されるのである。つまり文と絵とが同時に同じストーリを追っかけているようで，念が入りすぎていてわずらわしい。

『団子串助』は吹出しを用いず，後続の『ズク小僧』『長靴の三銃士』なども吹出しを使ってはいないで，ナレーションが絵の語り手になる。また『ひね子さん』『のんきな父さん』などは，ナレーションを用いないで絵と吹出しとでストーリを運ぶ。『正チャン』は，ナレーションと吹出しを使うという点で，継承者を持たなかった。だが，ナレーションで間接叙法で書いてあることと同じ意味を直接叙法にするという安易さを避ければ，またおもしろい作品世界が展かれたかもしれない。

V 『正チャン』の長所

『正チャン』はまるい童顔で，毛糸のスキー帽に折襟半ズボンの当時としてはハイカラな出で立ち。それに，臆病なかわいいリスを配した。このマスコット的組合せは，後続の子ども漫画の常套の一つとなるのである。

ストーリが混血系なので絵もまた忠実にこれを追う。『子(ね)年の国』では，西洋古代の甲冑の騎士姿が登場するかと思うと，七福神の大黒が大きな袋を背負って現れる。『白い烏』では，歌舞伎の舞台でしか見られない殿様や奥方が登場するが，暗躍する悪魔は西洋の古画でなじみのサタンである。圧巻は半人半馬のケンタウロイの襲撃と，コンドルの来襲。画家のデッサンが確かだから迫真感があって目をみはらせる。

しばしば登場する兵隊は，白い羽毛を頂いたフランスふうの軍帽に，赤い上衣に金モールの肋骨をかざり，赤い筋のはいった青い乗馬ズボンに長靴といったスマートな服装で，ナレーションの和風なのにくらべて絵はすべて洋風の好みが勝っている。これは樺島勝一のもっとも得意とするところなのだ。

背景の取り方，叙景のムードの出し方など，うまいものだが，構図はまだ舞台劇の段階である。人物はつねに全身像で，観客との距離・視角が固定している。映画的な視角がくふうされるのは，ずっと後のことになる。

VI 『ズク小僧一代記』の作者

ズク小僧の正体はミミズクの精(spirit)である。ある日一人の木こりが山に行き，木の上にミミズクの巣を見つけ，卵を一つ取って帰ってその妻に食わせる。妻は懐妊して男の子を産むが，それがズク小僧である。

ズク小僧は生まれ落ちると同時に非凡な性能を表す。まず初湯のときたらいの縁を駆け回って産婆さんを驚かせる。あまり暴れるので石臼に縛りつけられるが，引き摺って這いまわる。柱に縛られると，家を揺って近所の人たちは地震だと騒ぐ。その上，夜も目が見えるので，忍びこもうとする泥棒を退散させる。

こうした出生縁起は，『桃太郎』『瓜子姫』『かぐや姫』などをはじめ神話や民話に古くから見られるモチーフである。凡庸な庶民の生活の中に，神秘な性能を持つ非凡人の出現を望む原始心性の現れにほかならない。また神を畏れ敬うことに篤い原始社会では，神が直接この世に現れて裁きをすることの期待が強く，それがしばしば説話の中に取入れられている。この願望がひいては人間の姿をした神の誕生を空想することになる。(『正チャンの冒険』には，それがなまのままで現れていた。つまり正ちゃんの姿に神の誕生を見たのである。)その神の化身は，庶民に混って生活しつつ，神を恐れない者をこらしめ，神を恐れる者を護るのである。しかし彼は，神の化身であることは隠している。普通の人間の中にそういう神の化身が混っていると信ずることが，庶民の生活を安定させるのである。

ところが，一部の人たちの間では，こういう非凡の人間が神の化身であることを説明するために，彼の誕生を神秘化する必要があった。キリストも，シャカも，神秘的な受胎の神話に包まれた。同様に神秘的な受胎をもうすこし合理化しようとして，人間の精子によらない受胎，それに代わる動物や植物の精による受胎が想像されることになる。古来の英雄物語には，この形式をとるものが少くない。

さて『ズク小僧』も，この形式によって発想している。大正末期の作品とはいえ，古めかしすぎる。しかしストーリの作者が巌谷小波（さざなみ）（本名季雄，1870〜1933）とあれば，さもありなんということになろう。彼は周知のように明治中期に日本昔話を再興し，「おとぎ話」を開発した，児童文学の鼻祖である。しかし，大正中期に『赤い鳥』を中心とする創作童話の勃興によって，児童文学界からは疎外される立場になり，主として口演童話や児童劇に力を入れるようになっていた。その小波を担ぎ出したのが毎日新聞社で，その2年前から発足して好評だった朝日新聞社の『正チャンの冒険』に対抗しようとしたものらしい。『正チャン』を当時一流の挿絵画家樺島勝一が描いているのに対して，これにはやはり当時一流の童画家，岡本帰一（1890〜1630）を起用している。

1925(大正14)年1月に連載が始まり，10月に中絶している。『正チャン』は同年6月に姿を消しているが，この両横綱がほぼ同じ時期に引退したのには何か訳があるのかもしれない。

したがって『ズク小僧一代記』は，誕生から中学生(?)時代までで終わっている。あまりぱっとしない存在で，人気もわかなかったように記憶するが，のちのスーパーマンもの漫画の先駆となった功績は認められるべきであろう。

Ⅶ 『ズク小僧』のストーリ

『ズク小僧』は1回分4コマで，ストーリはそれで切れずに連続することは『正チャン』の形式を踏襲している。私の入手したものは新聞の切抜きで140回までであるが，ストーリは幕なしに次のように展開している。便宜上，話根ごとに切ってまとめる。

(1) 生い立ち（既述4回）

(2) 小学校脱出——7才で就学。友だちにはおかしい顔だと笑われる。競走・機械体操・綱渡りなど特技に秀でて，かえって友だちからいじめられ，仕返しをする。ついに学校にはなじめず，脱出する。（5〜9回）

(3) 家から放逐——特技で親たちに孝行するが，近所の子らとけんかをするので，家においてもらえなくなる。（10〜15回）

『ズク小僧』の1回め

(4) 寺へ奉公——寺の小僧にされる。そこではインチキの気合術師・町の施療病院のずるい患者・旅僧との禅問答・しわんぼの欲兵衛の無理な願いを，傾知で退散させる。（16〜30回）

(5) 金の欲——礼金をもらって諸国見物の旅に出る。泥棒にねらわれるが，金を百姓たちに撒いてやる。ところが金を持った連中は非行に走る。（31〜40回）

(6) 盲の母と娘——震災でおちぶれた盲の母とその娘の

『ズク小僧』の87回め

ために，得意の軽業で金を作ってやる。(41～43回)

(7) 香具師の悪行——子どもと猛獣を酷使して，その金で遊興にふけり悪事を働いている香具師をこらしめるために，子らと動物を逃してやる。(44～52回)

(8) 不良少年——盲の母と娘が香具師のために銘酒屋の酌婦に売られている。そこには名高い学者の子や，乱脈な華族の子弟など，不良少年がたむろしている。鍛え直してやろうとするが，みな逃げてしまう。(53～58回)

(9) 人の運命——娘をりっぱな邸の小間使に奉公させズク小僧は盲母と住む。その邸は，震災で大もうけをした職人上りの成金のもので，無教育のため子らは放任状態。地震成金と地震乞食とを比べて感慨する。(59～64回)

(10) 若旦那の映画プロダクション——成金の若旦那が活動屋を始めるので，娘は女優に，ズク小僧は機械かつぎになる。きざな若旦那は娘に言寄るので，谷底へ落としてこらしめる。(65～79回)

(11) 人情の冷さ——「知恵袋」から知恵を借りてカメラを改良し，暗い所でも透視で写るようにする。その原理を応用して，盲母の眼を治す。母はズク小僧を見て魔物だと疑う。小僧は家を去る。(80～89回)

(12) 女学校の裏面——有名な女学校の寄宿舎を透視カメラで覗き，生徒・女性舎監・男性当直教員のだらしない裏面生活にあきれる。(90～95回)

(13) 印度の僧——透視カメラの力で，印度の僧が盗まれた宝石を捜し当て礼金をもらう。その金をホテルのボーイたちに撒くと，けんかが始まる。(96～110回)

(14) 自在の珠——僧はズク小僧を弟子にし，小僧のレンズに「自在の力」を付与する。その霊力で食堂の客たちを踊らせる。(111～130回)

(15) 変身——みんな警官に捕われるが，自在の珠の力で僧をカラスにし，自分も石像に変身してその場を逃れる。(131～135回)

(16) ミミズクの山——カラスに変身した僧のあとを追い，ミミズクの山に来た。〔以下不足〕(136～140回)

Ⅷ 『ズク小僧』の表現形式

文は巖谷小波「案」となっているので，小波の書きおろしではないかもしれない。1回4コマで，総カタカナ，分ち書きで，1コマに50字（12～15文節）程度の文が付

いている。『正チャン』の約2倍で，これだけあると，かなりの内容が語れる。個人の発言はカギ括弧を付けて文中にいれてある。

このために，絵には「吹出し」がない。それで文の内容の1カットずつを描くことになるから，絵は挿絵のはたらきを受持つことになる。したがって『正チャン』のように絵と吹出しを見ていっても，ストーリが判るという無駄はなくなっている。あくまで文と絵とが並行した作品になっている。ただしこれは漫画の発達にブレーキをかける作品と言えよう。

絵は岡本帰一のペン画だから，拙かろうはずはない。だがこの童画家には，ストーリの持つ妖怪味を出させることは無理であった。すでに触れたが，ズク小僧の容貌にしても，初はすこしグロテスクに描いているが，まもなくかわいい顔になってしまっている。(挿絵参照)だから盲の母の眼が見えるようになって，恩人のズク小僧を怪物だと疑い出すくだりなど，文意を妨げることになっている。一般にもうすこし妖気が漂った画風だったら，いっそうよく物語にマッチしたであろうと惜しまれる。

ストーリと絵とが別人によって書かれる場合，両者の融合がたいへんむずかしいことがここでも指摘される。『正チャン』でも両者が分離したが，『ズク小僧』では，ストーリの古風な味と，絵の洋風な味とが調和しかねている。これらに対して，文も絵も一人で書かれたものに強味があることになる。

しかし『ズク小僧』の絵が文と並行する挿絵であることは，別の面での利点となった。というのは，構図に自由が許されたことで，画家は自由に場面を遠くから見たり，接近したり，ときには局部を接写したりしている。のちに開発される映画的手法が，素朴ではあるが，たくまずして形成されているのを見る。

Ⅸ 『ズク小僧』の本領

神の化身として，ミミズクの精を受けて，木こりの子に生まれた『ズク小僧』は，生まれながらに超人的性能を付与されている。その上，「知恵袋」と「自在の珠」とを得て，活躍の幅を広げていく。こうした着想は独創的なものではないが，ストーリ漫画の系譜から言えば，『正チャン』の和洋混交を反転して，ひたすらに古風な筋立てに戻そうとした意図がうかがわれる。その上『正チャン』のかわいいハイカラな都会っ子仕立であるのに引換え，『ズク小僧』は小学校時代から詰襟長ズボンのやぼな姿で，ミミズクの耳にかたどった頭巾をかぶっている。容貌も変ちくりん(画はそのイメージを生かさず，かわいい顔になっている)だ。腕白で，友だち仲間に適応できず，成人の世界へとび出していく。

『ズク小僧』の本領はそうして寺入りをしてから始まる。それからの彼の攻撃の対象になるのは，インチキ施療者，図々しい利己主義者，しわんぼうの欲兵衛，泥棒，欲の深い大衆，悪党の香具師，不良少年，女たらしの若旦那，有名女学校の裏面などで，一括すると世間をごまかして甘い汁を吸っている連中である。このように社会悪を暴露し，懲悪するのが，この作品のモチーフとなっている。

したがって，このストーリは，子どもの世界ではない。民話・昔話などには，成人の社会の批判をモチーフにしたものが現に残っているが，それは，もともと成人の文化財だったことに因るものであって，それをそのまま子どもに与える物語とするには問題がある。たとえば『ズク小僧』は貰った金をたびたびばら撒いて，拾う者どもがけんかをしたり，酒や賭博に耽ったりするのを嘲笑する。当時問題化してきた不良少年は，厳格すぎる親か，華族の乱れた家庭か，金満家から出ていると説明する。地震成金の浮薄な生活を衝き，これも当時の新企業だった活動写真会社の監督の女優たらしを持ち出す。おまけに有名女学校の裏面まで暴く。ここまでいくと，社会批評を越えて暴露趣味に走っている観がある。大正デモクラシーの諸悪風刺に集中している。小波はこの時55才。明治生まれの気骨で，軽佻に流れつつあった世相を罵倒したかったのであろう。ことに彼の摘発のほこ先が，金欲に集中しているのもおもしろい。

ところで上記話根の(6)から(11)までは震災のギセイ者で

ある盲の母と娘の面倒を見てやるが，(13)以降はがらりと話が変って，印度渡来の大僧正との出合いとなる。そのきっかけは今まで語られなかった「知恵袋」によって「透視カメラ」を発明し，次いで「自在の力」を付与してもらう。このあたりから話根が比較的長くなり，ミミズクの山にいたる所で切れている。察するところ暴露趣味から神秘的な話題に転ずるのかもしれないが，ここで資料は終っていて残念である。

ともあれ『ズク小僧』の前半に関する限りは，暗黒の裏を見透すことのできるミミズクの眼に映じた社会の裏面を暴露するのが趣向であった。小波の多くのおとぎ話の底流となっている儒教精神と懲悪主義とが，ここにもみなぎっているのである。

X 要　約

(1) 私は初期の新聞連載子ども漫画として，朝日新聞の『正チャンの冒険』と，毎日新聞の『ズク小僧一代記』とを取りあげた。両社ともストーリの作者と画家とがともに別人であることが共通している。朝日のほうは大正12年1月，毎日のほうは大正14年1月から掲載が始まっている。

(2) 『正チャン』はリアリズムの画家・樺島勝一，『ズク小僧』は童画家・岡本帰一に絵を描かせているが，ともに漫画にはてこずっているように見える。樺島のほうは西洋で発達した「吹出し」を使っているがこれを有効に使いこなせず，読者に戸惑を与えているように見える。岡本のほうはナレーションが長くて「吹出し」を使わないが，主人公の妖怪味が描けていない。しかし岡本の画面には動きがある。

(3) 『正チャン』はおおむねメルヘン仕立てで子どもの興味をそそるが，『ズク小僧』は大正デモクラシーの風刺漫画で子どもむきではない。前者は織田小星，後者は巌谷小波の作である。

(4) すでに時事新報では大正13年から『ひとり娘のひね子さん』が長崎抜天の筆で，また同じ年から報知新聞には『ノンキナトウサン』が麻生豊の筆で，いずれも「吹出し」を巧みに使い，ナレーションなしで掲載されていた。朝日新聞でも後の作品ではこれに倣い，また毎日新聞でも「吹出し」の研究を進めて，ナレーションを廃止するようになるとともに，漫画の専門家を起用するようになった。

参考文献

1) 小星作，東風人画『お伽正チャンの冒険』巻1～5，朝日新聞社，大正13～14
2) 織田信恒文，樺島勝一画『絵ものがたり，正ちゃんのぼうけん』講談社，昭和25
3) 飯沢匡他『樺島勝一集』（ひろば37号）至光社，昭和43
4) 飯沢匡『漫画五十年史』（現代1月号）講談社，昭和43
5) 作田啓一他『マンガの主人公』至誠堂，昭和40
6) 巌谷小波案，岡本帰一画『ズク小僧一代記』毎日新聞（切抜140回まで）大正14

SUMMARY

Two old comic strips for children which appeared in Japanese newspapers during the 1920's were reviewed. One is "Sho-chan no boken" (Adventure of Sho-chan) which started in the *Asahi Shimbun* in January, 1923, and the other is "Zuku kozo" (An owl pup) which began to appear in the *Mainichi Shimbun* in January, 1924. Each comic strip had a story-writer and a cartoon artist.

The pictures of "Sho-chan" were made by K. Kabashima, a realistic artist, and those of "Zuku Kozo" by K. Okamoto, a children's artist. Both of them apparently had difficulty with the construction of comics. Although Kabashima adopted the Western technique of using balloons for conversation, it appears that he could not use them effectively, and that they puzzled the readers. Instead of balloons, Okamoto used long passages which attached to the pictures. Although he did not succeed in expressing the apparitional character of the hero, his pictures conveyed movement.

The story of "Sho-chan" is Märchen-like and attracts the interests of children, while "Zuku-Kozo" is not suitable for children because it is a caricature based on Taisho democracy. The former was written by S. Oda, and the latter by S.Iwaya.

"Hitorimusume no Hineko-san" (Hineko, the only daughter) by B. Nagasaki started in the *Jiji Shimpo* in 1924, and "Nonki na Tosan" (Easy-going Dad) by Y. Aso began in the *Hochi Shimbun* in the same year. Both of these used balloons effectively instead of attached passages. Later, the *Asahi* as well as the *Mainichi* progressed the usage of balloons, abolished attached passages, and began to employ professional cartoonists.

子どもの読書態度の分析*

―中学一年生が想起する自己の読書歴による―

東京学芸大学附属大泉中学校

増田信一**

1. 問題提起と研究の方法

① 従来，読書興味の発達についての研究は低調であった。その理由はいろいろ考えられるが，ひとりひとりの児童生徒について，長い期間にわたって読書記録をとり，継時的に調査を積み重ねていくことの困難さが最大の原因ではなかったかと思う。その中でも，読書興味の発達に応じて，読書材がどのように変わっていくかという研究は，現場の教師の手によって，いくつか発表されている。

その一方，子どもの読書態度がどのように変わっていくのかという研究は，特定の学年における実態報告を除くと，ほとんど例がなかったといってよい。

② これまで，読書態度の系統を示すものとしては，国語科の学習指導要領の各学年の学年目標にその大綱がある。現行の学習指導要領では，

小学1年　やさしい読み物に興味をもつようにする。

小学2年　やさしい読み物を進んで読むようにする。

小学3年　いろいろな読み物を読もうとする態度を養う。

小学4年　読む量をふやすとともに読書の範囲を広げるようにする。

小学5年　読み物を自分で選択することができるようにする。

小学6年　適切な読み物を選んで読む習慣をつけるようにする。

中学1年　読み物に親しむ態度を養う。

中学2年　選択して読書し，考えたり味わったりする態度を養う。

中学3年　読書の態度と習慣を身につけさせる。

以上のように示されているが，発達段階をふまえた配当としては，不自然さがめだつ。特に，小学校の6年間に対して，中学校の3年間の学年目標が小学校と重複しているし，小学校の6年間にしても，このような抽象的な表現では子どもの実態がどのように反映されているのか疑問である。

③ 中学1年国語科の10月の単元に，『広がる読書』（学図版）があり，その第一教材に「わたしの読書歴」がある。この教材は，幼稚園時代から中学1年生までの読書歴をふりかえった生徒作品である。この教材を学習の導入段階におき，ひとりひとりの生徒が自分の読書歴をふりかえり，今後の読書活動について考える学習を展開した。学習の中で，各個人が自分の読書歴について，それぞれの学年で特に印象に残ったことを思いだし，「印象に残った本の名」・「読書態度」・「読書についての反省」を書きだす方法をとり，それによって，各個人の読書興味の発達の経過をたどり，それらを集計し，分析しながら，この問題について切りこんでいこうとしたわけであ

---

* An analysis of children's reading attitudes based on seventh-grade students' written report on their reading experiences.

** MASUDA, Shinichi (Oizumi Junior High School, Tokyo Gakugei University)

る。調査対象としたのは，中学1年生の男子61名，女子60名である。

なお，今回は，「印象に残った本の名」の集計に関するものは省略して，「読書態度」の分析に焦点をしぼることにした。

2. 「わたしの態度」の集計と分析

それぞれの生徒が，幼稚園時代から中学1年までの各学年について書いたものを集計したのが，次の学年ごとの表である。なお，複数の項目について書いた者もいるので，合計数は人数の合計をオーバーする。なお，各学年の順位で，△印のついているものは，読書材に関するものである。

幼 稚 園（4・5・6歳）

順位		計	男	女
△	絵や写真を見て楽しんだ	63	34	29
1.	読んでもらって楽しんだ	25	9	16
2.	読みかえして楽しんだ	20	9	11
3.	すじのおもしろさを楽しんだ	15	6	9
4.	主人公にあこがれた	12	5	7
5.	すじを想像して楽しんだ	11	5	6
6.	手あたりしだいに読んだ	6	3	3
7.	文字を読むのが楽しかった	5	1	4
8.	本の主人公と自分を混同した	4	3	1
8.	話に登場するものをほしがった	4	4	0

小 学 1 年（6・7歳）

順位		計	男	女
1.	すじをおぼえるのが楽しかった	17	11	6
1.	話のおもしろさを楽しんだ	17	5	12
3.	文字を読むのが楽しかった	16	13	3
△	童話に熱中した	16	8	8
△	絵や写真を見て楽しんだ	15	11	4
4.	主人公にあこがれた	13	7	6
5.	感想を書くようになった	12	5	7
6.	手あたりしだいに読んだ	8	4	4
7.	読みかえして楽しんだ	7	2	5
8.	母と本について話し合った	6	2	4

小 学 2 年（7・8歳）

順位		計	男	女
1.	話のおもしろさを楽しんだ	20	11	9
△	伝記に熱中した	17	9	8
2.	主人公にあこがれた	11	5	6
3.	読書量が増した	9	4	5
△	冒険物語に熱中した	8	7	1
4.	読書の楽しさが増した	8	6	2
4.	考えながら読むようになった	8	6	2
4.	長い本を読むようになった	8	3	5
4.	感想を書くようになった	8	2	6
8.	読みかえして楽しんだ	7	2	5

小 学 3 年（8・9歳）

順位		計	男	女
△	伝記に熱中した	23	13	10
1.	主人公にあこがれた	17	9	8
△	名作物語に熱中した	17	1	16
2.	読書の楽しさが増した	13	8	5
△	いろいろの種類の本を読んだ	12	4	8
3.	話のおもしろさを楽しんだ	11	7	4
△	科学的な本に熱中した	10	5	5
△	推理小説やＳＦに熱中した	10	6	4
4.	感想文をよく書いた	9	3	6
5.	手あたりしだいに読んだ	8	7	1

小 学 4 年（9・10歳）

順位		計	男	女

△	推理小説やＳＦに熱中した	23	14	9
△	文学的な本に熱中した	21	9	12
△	伝記に熱中した	13	3	10
1.	感想文をよく書いた	12	3	9
2.	内容を想像しながら楽しんだ	10	6	4
△	いろいろの種類の本を読んだ	10	3	7
3.	友だちと話し合ったり競争した	9	3	6
△	科学的な本に熱中した	9	7	2
4.	人間の生き方について考えた	8	6	2
4.	深く考えて読んだ	8	3	5

小　学　5　年（10・11歳）

順位		計	男	女
△	いろいろの種類の本を読んだ	28	11	17
△	ＳＦや推理小説に熱中した	24	13	11
△	文学的な本に熱中した	16	6	10
1.	読書の楽しさが増した	15	11	4
2.	人間の生き方について考えた	14	8	6
3.	感想文をよく書いた	11	7	4
△	科学的な本に熱中した	11	8	3
△	伝記に熱中した	9	4	5
4.	場面や情景をよく考えた	9	6	3
5.	図書館をよく利用した	7	4	3

小　学　6　年（11・12歳）

順位		計	男	女
△	文学の本に熱中した	28	15	13
△	いろいろの種類の本を読んだ	24	13	11
1.	深く考えながら読んだ	18	6	12
△	ＳＦや推理小説に熱中した	14	6	8
2.	人間の生き方について考えた	11	5	6
△	歴史の本に熱中した	11	4	7
3.	あまり読まなくなった	9	4	5
△	科学的な本に熱中した	8	5	3
4.	友だちと話し合ったり競争した	7	3	4
△	古典文学に熱中した	7	2	5

中　学　1　年（12・13歳）

順位		計	男	女
△	文学の本に熱中した	27	16	11
△	いろいろの種類の本を読んだ	26	14	12
1.	よく考えて批判的に読んだ	23	8	15
2.	人間の生き方について考えた	14	7	7
△	ＳＦや推理小説に熱中した	12	6	6
△	特定の作家の文学を読んだ	10	4	6
3.	感想を深くもてた	10	5	5
3.	著者に興味をもった	10	3	7
△	事実物語や論説に熱中した	9	5	4
5.	本を楽しんで読んだ	8	6	2

上の表の「わたしの読書態度」の中には，読書材の種類に関するものが含まれているので，これらを除外していくと，それぞれの学年の特色がはっきりしてくる。子ども自身が自分の読書態度についてふりかえったものだけに，「読書の楽しさ」に関するものが多い。特に低学年のほとんどの項目が「読書の楽しさ」に関したものであることは注目にあたいする。

「読書の楽しさ」について，各学年の上位の項目を拾っていくと，それぞれの項目が発達段階にそったものであることがはっきりしてくる。

幼稚園　1.読んでもらって楽しかった
　　2.読みかえして楽しんだ
　　3.すじのおもしろさを楽しんだ
小学1年　1.すじをおぼえるのが楽しかった
　　1.話のおもしろさを楽しんだ
　　3.文字を読むのが楽しかった
小学2年　1.話のおもしろさを楽しんだ
　　2.主人公にあこがれた

3.読書量が増した

小学3年 1.主人公にあこがれた

2.読書の楽しさが増した

3.話のおもしろさを楽しんだ

小学4年 1.感想文をよく書いた

2.内容を想像しながら楽しんだ

3.友だちと話し合ったり競争した

小学5年 1.読書の楽しさが増した

3.感想文をよく書いた

小学6年 4.友だちと話し合ったり競争した

中学1年 5.本を楽しんで読んだ

「読書の楽しさ」の系列と並ぶ，もう一つの系列は「考える読書」である。「感想文を書く」ことは，この二つの系列の両方に属する面があるので，両方に入れて考えていく。

小学2年 4.考えながら読むようになった

小学3年 4.感想文をよく書いた

小学4年 1.感想文をよく書いた

4.人間の生き方について考えた

4.深く考えて読んだ

小学5年 2.人間の生き方について考えた

3.感想文をよく書いた

4.場面や情景をよく考えた

小学6年 1.深く考えながら読んだ

2.人間の生き方について考えた

中学1年 1.よく考えて批判的に読んだ

2.人間の生き方について考えた

3.感想を深くもてた

3.著者に興味をもった

同一の項目が重複して出てくるが，自然に発達段階にそったものが出てきている。これらを概括的にまとめると，次の三つの段階にまとめられる。

A．読書の楽しさを求める時間　幼稚園・小学1年・小学2年・小学3年

B．読書の楽しさと考える読書が混在し移行する時期　小学4年・小学5年

C．考える読書を追求する時間　小学6年・中学1年

その中で，小学6年の第三項目「あまり読まなくなった」だけが異質なものであるが，中学時代になって，読書量が低下する一般的な傾向を考える上で，すでに小学校時代からこの傾向が出はじめていることは注目したい点である。

表にあらわれた「読書態度」の項目を整理していくと次のようになる。

a．読んでもらう楽しさ　幼稚園の1

b．文字を読む楽しさ　幼稚園の7　小1の3

c．母と本について話す楽しさ　幼稚園の8

d．すじのおもしろさ　幼稚園の3

e．すじを想像する楽しさ　幼稚園の5

f．すじをおぼえる楽しさ　小1の1

g．話に登場するものをほしがる　幼稚園の8

h．本と自分を混同する　幼稚園の8

i．主人公へのあこがれ　幼稚園の4　小1の4　小2の2　小3の1

j．読みかえす楽しさ　幼稚園の2　小1の7　小2の8

k．話のおもしろさ　小1の2　小2の1　小3の3

l．読書量が増す　幼稚園の6　小1の6　小2の3　小3の5

m．読書の楽しさ　小2の4　小3の2　小5の1　中1の5

n．長い本を読む　小2の4

o．内容を想像する楽しさ　小4の2　小5の4

p．友と話し合い競争する　小4の3　小6の4

q．感想文を書く　小1の5　小2の4　小3の4　小4の1　小5の3

r．図書館を利用する　小6の5

s．考えながら読む　小2の4

t．深く考えて読む　小4の5　小6の1

u．人間の生き方について考える　小4の4　小5の2　小6の2　中1の2

v．深い感想をもつ　中1の3

w．批判的に読む　中1の1

x．著者に興味をもつ　中1の3

aからqまでは「読書の楽しさ」に関するもので，pからxまでは「考える読書」に関するものと考えてよいと思う。

次に，読書材の種類に関するものとしてあげられているものは，

a．絵や写真を見て楽しんだ　幼稚園　小1

b．童話に熱中した　小1

c．伝記に熱中した　小2　小3　小4　小5

d．冒険物語に熱中した　小2

e．名作物語に熱中した　小3

f．いろいろの種類の本を読んだ　小3　小4　小5　小6　中1

g．科学的な本に熱中した　小3　小4　小5　小6

h．推理小説やSFに熱中した　小3　小4　小5　小6　中1

i．文学的な本に熱中した　小4　小5

j．文学の本に熱中した　小6　中1

k．歴史の本に熱中した　小6

l．古典文学に熱中した　小6

m．特定の作家の文学を読んだ　中1

n．事実物語や論説に熱中した　中1

以上の読書材の種類の変化は，読書態度の成長と大きな関連がある。両者を重ね合わせていくことによって，それぞれの学年の読書能力を考えていく上でも参考になると思う。

なお，今回の調査の一部として実施した「わたしの読んだ本」の集計と分析[1]から「各学年で読んだ本の特色」をまとめてみると，次のようになる。

幼稚園　絵本・童話・寓話・昔話

○童話が大部分であるが，絵本になっているものが多い。

小学1年　童話・寓話・空想的な物語・社会的な物語

○童話が大部分である。絵本はほとんどなくなる。

小学2年　社会的な物語・空想的な物語・少年少女物語・伝記・童話

○物語が大部分である。伝記が登場しはじめる。

小学3年　探偵推理小説・伝記・科学読み物・社会的な物語・空想的な物語・少年少女物語

○読書材が多様化してくる。探偵物が登場してくる。

小学4年　探偵推理小説・空想的な物語・少年少女物語・少女小説・科学読み物・伝記

○ルパン・ホームズ・江戸川乱歩の探偵物が上位を独占している。

小学5年　探偵推理小説・少年少女小説・翻案された小説・少女小説・童話・科学読み物・課題図書・事実物語

○読書材がさらに多様化してくる。

小学6年　課題図書・少年少女小説・純文学・翻案された古典や小説・事実物語・SF小説

○文学作品への傾斜が出てくる。課題図書が大きな比重をもっている。

中学1年　現代文学・純文学・少年少女小説・事実物語・SF小説

○現代文学への傾斜が出てくる。

読みものの種類はもともと便宜的なものであり，特に児童図書の分野には定説となるような分類がない。今回は，読まれた本について，私の主観的な18の分類によって分けた。これは，子どもの読書材の実態をできるだけくわしくしたいという意図によるものである。

この結果を，全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共催して毎年実施している全国読書調査[2]の結果と比較してみると，低学年では2年程度の開きがあり，高学年でも1年以上の開きがあるので，今回の調査そのものが，一般の公立校と比較して1～2年の開きがあると考えたほうがよさそうである。

この1～2年の開きをどうみるかということは一つの問題である。私の前任校である練馬区立中村中学校で七年間に読書ノートを書かせて積み上げた実績と，本校で七年間読書ノートを書かせてきて得た実績とを比較すると，読みの能力の上ではそれほど多くの差は認められな

い。違いがあるとすれば，読書力の面よりも，家庭における読書環境の違い，付属学校という特異な集団（公立校の下位生があまりいない現状）がかもしだすふんいきなどが，生活年令よりも背のびをした読書態度をとらせているのではないかと思われる。

3. 「読書態度についての反省とこれからの読書」の集計

それぞれの生徒が，自分の読書態度について，幼稚園時代から現在までをふりかえったあとで，自分の読書態度について反省し，これからの読書のしかたについて考えたものを集計したのが，次の二つの表である。

＜注＞ ○男・女・計の数字はそれぞれ実数を示す。

≪反　省≫	計	男	女
1. 文学的な本にかたより過ぎた	35	11	24
2. 読書量が少なかった	14	11	3
3. 読書するときとしないときとのむらがあった	13	7	6
4. 浅く読むだけで終わっていた	12	5	7
5. 読書感想文を少ししか書かなかった	10	3	7
5. すじや内容のおもしろさだけで読んでいた	10	8	2
5. 文学以外の特定の種類の本ばかり読みすぎた	10	8	2
5. 伝記をあまり読まなかった	10	2	8
9. 探偵・推理小説ばかり読みすぎた	7	5	2
10. 読書速度が遅く時間がかかりすぎた	6	4	2
10. 途中で読むのをやめてしまった本があった	6	4	2

≪これからの読書≫	計	男	女
1. いろいろの種類の本を読みたい	49	20	29
2. 自分の感想をじっくりおさえたい	14	7	7
2. 日本文学をもっと読みたい	14	9	5
2. 一冊の本をじっくりと読みたい	14	7	7
5. 読書量をもっとふやしたい	13	10	3
6. 伝記をもっと読みたい	11	3	8
7. 事実物語をもっと読みたい	10	3	7
7. 深く考える読書にしたい	10	2	8
7. 外国文学をもっと読みたい	10	6	4
10. 科学的な内容の本を読みたい	9	3	6
11. 厚い本を読みたい	8	7	1
12. 作者の意図を考えて読みたい	7	5	2

中学生にとって，「読書態度の反省」をすることは，格式ばった，自己批判的なものになりがちである。この集計をみても，11の項目すべてが自己批判的に考えたものばかりである。そのために「これからの読書」では，「反省」と対応する対策が出されている。そういう意味で，二つの表を表裏一体のものとしてみていく必要がある。

読書態度の「反省」と「これからの読書」とをくわしくみていくと，生徒自身の読書に対するとりくみ方が変容しつつあるようすがうかがえる。これは，中学へ入学してから約半年間の毎日の授業の中で吸収した「読書観の変容」が土台となっているわけであるが，直接のきっかけとなったのは，一学期中に二回提出した読書ノートである。

第一回の提出は5月で，ノンフィクションの本を選んで書くことになっていた。文学作品への傾斜がかかっていた子どもたちにとって，この課題はきついものであったようである。しかも，「内容紹介」と「考えたこと」をそれぞれ800字書くという課題だったから，それまで小学生的な読書感想文（あらすじと感想を混在させたもので，問題意識の希薄なもの）になれていた者はびっくりしてしまったらしい。そこで，私が下した評価は，各学級平均Aが10名，Bが20名，Cが10名であったために，自分の評価点が低すぎることへの反発と，どうしたらよりよい評価点が獲得できるだろうかという心配が出てきて，「読書感想」についての意識が高まっていったわけである。その評価に際しては，A・B・Cの三段階だけでなく，A^-・B^-・C^- という，それぞれの段階の中にマイナスの記号を約半数つけておいたことも，大きな効果をもたらしたものと思われる。

第二回の提出は6月で，フィクションの本を選んで書くことになったが，かなりの生徒の感想が変容しはじめていた。

このような経過をたどって，「反省」と「これからの読書」が出てきたわけである。その後も読書ノートの提出は続けているが変容の傾向は着実に現れている。

4. 若干の補足とまとめ

① 私は，これまで読書能力についての研究をすすめ，読書能力表についても独自の案を発表している[3]が，今回の調査結果も，それとの関連において，もっとくわしく見ていく必要があると思う。「読書態度」は「読書能力」の中でもかなり大きな比重を占めるものであるだけに，国立の付属校一校だけでなく，もっと広い範囲に渡って調べていく必要があると思う。

② 今回の調査方法は，子ども自身が，過去の記憶をたどっていくという方法をとった。これは，大部分の生徒が隣りの附属小学校時代に『私の生い立ち』という個人文集をまとめ，その中で読書歴を残していたことが役だっている。調査範囲を広くひろげた場合に，記憶再生法が実施可能か否かという心配が残る。

③ 今回の調査は，個人カードに書かせたものを集計して，全体の傾向を出したのであるが，ひとりひとりの個人をとってみると，読書習慣のない者，読書材の偏向している者，乱読しすぎる者など，今後の指導を要する者がかなり存在する。学級での全体指導と並行して，各個人の面接指導をしているが，よく聞き入れてくれる者ばかりがいるわけではないので，一部の者はとり残されそうな状態にある。

④ 今回の調査によって，男女差はかなり早くからあることがはっきりした。すべての表に男女別の数字を示したのも，このことをはっきりさせるためのものである。中学校時代になってから男女差がはっきりしてくるという考え方が一般であるが，今回の調査によると，小学校の低学年から，男女差を考慮した指導をする必要がありそうである。

⑤ 最初に紹介した，学習指導要領の各学年目標との厳密な比較はできなかったが，子どもの実態がかなり多様化しているということは，この調査によって示すことができたと思う。

<注>

1) 増田信一「子どもの読書歴の分析」昭和49年　東京学芸大学附属大泉中学校研究集録第14集　2～12ページ

2) 毎日新聞社「読書世論調査」1970～1974年版

3) 増田信一「基本的な読書能力の分析」昭和47年　読書科学55号

SUMMARY

121 seventh-grade students were asked to recall their past reading experiences, with the help of their own reading records, and to report on their reading attitudes in each previous grade. Their reports were tabulated in terms of the frequency and type of attitudes for each grade.

They recalled that they enjoyed their reading in the lower grades, and that they read with thinking in their upper grades. Their reports reflected three developmental steps of reading attitudes : a) in grades K-3,a period of reading to seek pleasure, b) in grades 4 and 5, a period of transition, and c) in grades 6 and 7, a period of pursuing reading with thinking.

小学生における人間の相互感情理解の発達的研究*

―「はだかの王様」の感想文の分析―

東京都港区立港南小学校

松　原　俊　一**

は　じ　め　に

筆者は，先に「悪に陥る人間の許容に到る発達的特徴」（「読書科学」）を発表した。この拙論は，人間の犯す悪について，小学校４・５年生の「五色のしか」の感想文を分析した結果，悪の否定から肯定へと変化することを明かにした[1]。そして，そこには人間の相互感情の投入がおこなわれると考えられた。

そこで，本稿は，小学生において，人間の相互感情の理解が，どのような発達をたどるか。「はだかの王様」（学図４下）の教材を使って，子どもの感想文を分析し，この問題を解明しようとするものである。

1.　調査の概要

a　調査対象　　204名

東京都港区立港南小学校	１・４年
赤羽小学校	２・３年
氷川小学校	５年
桜小学校	６年

b　設　　問

ア　大臣・役人・王様・町の人たちは，なぜ見たとおりのことを言わなかったのですか。またそのことをどう考えるか。

イ　小さな子どもは，なぜ“王様ははだかだ！”とさけんだのですか。またそのことをどう考えるか。

ウ　王様は，自分がはだかであることを知りながら，なぜ行進を続けたのですか。またそのことをどう考えるか。

備考：１・２年生には，本文を教師が数度読み聞かせの方法をとった。

2.　登場人物の立場や心情に触れられない表面的見方中心の１年生

〔資料〕

- 自分がばかものだからです。役人のことをいけないと思いました。
- おこられるからです。おこられるとこまってしまいます。おもしろい人たちです。
- 見えないと言うとばかかわるものになります。そういう町の人たちがふしぎです。
- 小さな子はいい子です。だって本当にきていないからはだかだと言ってくれたから。私もその子と同じように言います。あの子はいい子です。
- 王さまはふくを見せるのがすきだからです。おもしろかったからです。
- せっかくはじめたのにやめるのがいやだったから。行れつがすきだった。
- 町の人にわらわれるから，がまんをしていたのです。
- はずかしいからです。おもしろい王さま。

---

* Development of understanding mutual feelings among the characters in “The Emperor’s New Clothes” in elementary level.

** MATSUBARA, Shunichi (Konan Elementary School, Minato-ku, Tokyo)

〔考察〕

きわめて表面的かつ外面的なものの見方であることが特徴である。登場人物たちが，なぜそのような言動をとらざるを得なかったのかについてまでは，触れることができていない。そのため「行列がすきだったから」とか，「そういう町の人たちがふしぎです」のように，現象的なことがらへのこだわりが中心をしめてくる。

また感情の移入も，登場人物べったりの中で，自分の生活感情をまる出しにしてしまう。たとえば，

- ……ひみつにするのはいけません。ひみつにしてくれないとおりこうです。
- うそをつかない正直な人がすきです。
- そんな王さまはだめな王さま。きらい。

などがその例である。好きだとか嫌いだとか言う，自分の生活感情とまだ分離していないべったりの感情表出である。

「小さな子どもの発言」についても，“いい子・えらい・私もそうする”などと言った生活感情的な方向に流れていき，大人たちの言えなかったことを，なぜ小さな子どもが言えたのか，については，まったく考えていない。「王様の行進」の場面についても同様で，“やめるのがいや・はずかしい・がまん”の段階でのとらえ方が，せいいっぱいである。不安から虚栄へと移行する人間感情には，触れられていない。

ただそのような実態の中で，次のような例が1名あった。

- 自分のかんじたことを言わなかったのはよくないと思ったけれど，しかたがなかったんだからうそをついてもいい。
- 王さまや町の人たちは，うそつきではないと思う。ばかものと言われたり，王さまをやめさせられるとこまるから，うそをついたのです。

この感想からは，人間における嘘がなぜつかれるのか，という方向でのとらえ方がうかがえる。人間の嘘とは生活がおびやかされたり，他人からよく思われたいという思わくからつかれるものであるという，不可抗力的立場を許容するものの見方の発達がうかがえる。

ただし，この子どもを含む他の感想文を記述できたのは，学級の半数弱であって，あとは自分の考えを言葉におきかえると言うことを知らなかったり，また考えるということ自体がわからない段階にいる子どもたちであった。きわめて1年生らしい実態が目についた。

3. 見る目，見られる目を意識するものの見方中心の2年生

〔資料a〕

- けらいたちに知られるとはずかしいから言わなかった。ぼくもひみつのことを知られるとはずかしい。
- わるものとか，ばかものと思われたくないからです。
- 自分がそんなふうにわるものに思われたり，そんな目で見られるのがいやだったから。
- ばかだと言われたり思われたりしたくなかったから言わなかった。いつもいばっているんだから，言われたっていいじゃないか。

〔資料b〕

- 王さまは，自分がばかでわるいんだと言われるのがいやだったから。王様は本当はばかだと思います。いくら王様でも，うそをつくのはいけないと思う。
- みんなにばかだと言われるからです。かくしていることはぜったいわるいことです。
- 子どもは本当にえらい子だ。本当に勇気のある子だ。大人たちより勇気のある子です。みんなかんしゃして，そのようになればよい。子どもなのに，とてもりこうです。

〔資料c〕

- いまさら行列をやめてしまっても，みんなにわかってしまったし，自分がわるいのだからしかたがない。でも，気がついたらすぐやめればよかったのに。
- いまさら行列をやめるわけにはいかない．王様はえらい。
- ぼくはいいと思いました。泣きたい気持ちになりました。町の人たちは王さまにめいわくするみたいです。
- 悪人がたのしそうにはたらいているから，かわいそう

だから“ああ，すばらしい”と言ってやったのだろう。

〔考察〕

a　相手意識の強い見方

この学年でも，1年生で見えていた「表面的・外面的」なものの見方中心であるが，そのほかの傾向として，資料aのような感情表出が多く目についた。これは，相手意識の大変に強いものの見方である。見る目と見られる目とがあり，その間における感情の流れである。主として，「そう思われるといやだ。はずかしい。そんなふうに見られたくない。」という，相手の視点を意識した一方交通的な眺め方である。1年生の「生活感情のべったり」の見方から一歩すすんで，登場人物の立場を意識する「二者関係におけるものの見方」の発達がうかがえる。

b　一部に見えた二者択一的善悪判断

資料のbは，2年生の3分の1弱をしめていた「二者択一的善悪判断」による見方である。登場人物相互の立場や言動を対比させ，その結果として，「善か悪か」という二者択一的絶対感情を投入させてしまう。登場人物のよって立つ立場や心情，あるいは条件等そのものに目を向けるのではなく，その行為そのものを，善悪というはかりにかけて評価判断してしまうものの見方である。

「見る目・見られる目」を意識する二者関係におけるとらえ方から発達して，登場人物の立場や心情などの相互関係に目を向ける，ものの見方と考えられないこともないが，そこに道徳律をあてはめるところに特徴がある[2)]。

c　わずかであるが相互感情が見られる

資料cの例になると，登場人物相互の立場や心情の理解からはじまる，人間相互の感情の摂取理解のものの見方の発達がうかがえる。

- やめるわけにはいかなかった。王さまはえらい。
- 町の人たちは王さまにめいわくするみたいです。

などのように，その行為を肯定的に眺めていこうとする見方がある。ただし，この例は2年生児童の中でも，きわめて少数であった。

4.　二者択一的絶対感情による道徳律をあてはめる見方中心の3年生

〔資料a〕

- 大臣や役人たちはうそつきです。ばかだと言われるからって，うそをつくのはわるい。ばかだ。本当のことを言わないなんてよくない。うそはわるいことだ。
- 作ってもいないのに見えるはずはない。それこそ本当のばかだ。役人のうそつきめ。
- おしゃれな王さまになりたければ，自分がえらくなって，もっといい服を作ってもらえばいい。ずうずうしい。

〔資料b〕

- 王さまがガッカリしたり，ショックを受けるから言わなかった。いい人だと思った。
- どうして本当のことを言わないのだろう。でも私は，町の人たちのことをとてもえらいと思った。

〔資料c〕

- 行列をと中でやめるとはずかしいから。はじめて王様をえらいと思った。
- いまさらやめてもしかたがないから，やめるとよけい何か言われる。
- 自分で行列をさせたのに，いまさらやめるわけにはいかないし，もし見えないと思っているのがうそだといけないし，自分の見えないのも，みんなの見えないのもいっしょだから行列をつづけた。

〔資料d〕

- 子どもは正直な子。本当のことを言った正直な子。本当にきていないからはだかだと言った。うそをつかない良い子。勇気がある。子どもは大人より頭がいい。見たとおりのことをちゃんと言ったからいい子。(32名中27名)
- まだ小さいのでそんなことを言った。子どもは小さいしそんなことを気にしない。その子はあまりよくない子。(32名中3名)

〔考察〕

a　二者択一的善悪判断

2年生で3分の1弱みえていた「二者択一的善悪判断」によるものの見方が，圧倒的多数をしめる。登場人物の立場や行為，あるいは言動に目を向けるが，それらを眺める視点として，たえず「善悪」というものさしを用意して，それにあてはめて考えようとする。そのためものの見方が即「いい――わるい」「うそつき――正直」「だめ――よい」のいずれかであって，それ以外であることはない。登場人物たちが，なぜそのような言動をとったのか，についてまでは考えようとしない。また例えば「嘘がなぜつかれるのか」という人情の方向から考えてみることができず，「嘘」という行為そのものをとらえて，「うそをつかないほうがいい，どきょうがない，ひきょうもの」と難くせをつけてしまう。3年生の中心をしめる考え方が，このタイプであった。

b　登場人物の行為を肯定しはじめる

資料b・cとしてひとまとめにしたのがこれである。ここでは，資料aとは反対に町の人たちや大臣たちを「いい人たちだ。とても偉い」と同情し，その行為を肯定するものの見方が出てくる。その比較対比は資料4としてとりまとめた「小さな子どもの発言」に対する反応とによってさらに明かである。そこでは「小さな子」に対して，“その子は，あまりよくない子だ”と，批難が出ている。1年生から3年生のほとんどの児童が，「その子は正直だ。勇気がある。えらい。本当のことを言って立派だ」と賞讃しているのに比べると，きわめて対照的である。つまり，aグループの反応に対して，b・cグループの反応はまったく正反対であることが目につく。

またcグループの反応を眺めてみても，そのことは言い切れる。cグループの反応は，裸で行進を続けているときの，王様の心境についての理解である。“はずかしいから，しかたがない，自分で行列をさせたから”などの反応は，「恥・面子」などの人間感情を指摘する素朴な感情表出とみていい。

それゆえに，b・c・dグループの反応からは，1年から2年にかけてみえていた表面的二者関係的なものの見方からさらに発展した登場人物の心情そのものに立ち入って眺めるものの見方の発達がうかがえる。単なる行為や言動に目を向けるのではなく，人間と人間との間に交差する対人感情，あるいは「何が彼をそうさせたのか」という行為の源としての人間の立場心情の理解から肯定への段階が3年生なりにうかがうことができる。ただしそれも3年生では一割ほどの子どもたちであった。その発達が顕著な傾向として見られるのは，4年生になるまでまたなければならない。

5.　人間の相互感情の理解に強い関心をしめす4年生

〔**資料a**〕

- もし大臣が見えないと言うと（この場合一番あたまのいい大臣），ばかと言われ，また大臣の位からおろされてしまうかもしれません。もしかするとバカなのをかくしていたというので，ころされてしまうかもしれません。お役人もそうです（この人たちは王様にかないません）。首になったら家の人もこまってしまいます。ですから，仕方なくうそをついたのです。
- 自分がばかで役に向いていないことを知られたくなかったのです。また自分でも自分が役に向いていないことを知りたくなかったからです。
- 王さまは，大臣たちに見えて“これはいけない”と思ってこわくなって“ようしうそをついちゃえ”と思って見えると言った。
- そんなことを言ったら王様に恥をかかせるようなものであると思い，偉い王様にそんなことを言ったら失礼になると思い，わざわざおせじのようなことを言った。
- 王さまは偉いから“はだか”と言うと，ぶじょくしたことになり，王様のきげんをとるためにそう言った。また，行列がだめになるから大人の人はえんりょしていた。
- 子どもと大人の頭はちがうから。大人は子どもとちがって先きのことを考えるから，“さからってはわるいなあ”と思った。

〔**資料b**〕

- その小さな子は，しょうがない子です。どうしてかと

言うと子どもは王様のきげんをとることなど考えないで，そう言ったから。

- きっとその子は，小さい子どもなので，何もわからないように小さいので，見たことをはっきり言ったのです。また王様のごきげんをとることが知らなかったのです。
- 子どもは，王様や大臣たちと話をあわせようとする考えがなく，子どもは王様は何もきていないという考えで，大人のようにこわがることがなかった。
- この子のしゃべったことは，別にいいとは思わない。それであたりまえなのだから，それでよい。この子は自分がバカ者でも役に向かなくても，そんなことは考えないで発言したと思う。だからこの子の言っていることは普通のことである。

〔**資料c**〕

- 王様には二人の男にだまされても，やはり行列をやめるわけにはいかない何かがあったのでだろう。
- 王様は自分も知っていて，そのまま行列をやめても，あとで“おっちょこちょいの王様”と言われて，へんなうわさがひろがるので，せめて自分だけでも知らん顔をしていれば，行列をやめないよりは変なうわさが立たないと思って，そのまま続けた。
- もうここまできて大さわぎしたくなかったから，仕方がないような気持ちで行列を続けて見せかけていた。
- 今やめるとうそをついていたことになる。そうするとよけい変なうわさが立つ。すると町の人に悪口を言われる。だからやめるより続けるほうがいいのだ。
- どうせ町の人たちも自分のはだかに気がついてるし，自分も知っている。だからこのまま行列を続ければ，町の人たちは“自分たちがまちがっていたのか”と，あわてるだろう。そして“やっぱり王様だけに見える服なのかなあ”と不安に思うにちがいない。だから行列をやめるより，いっそこのまま続けたほうが，自分（王様）のためになると考えたからです。

〔**考察**〕

a “嘘”を肯定しはじめる

3年生の一部の子どもに見えていた登場人物の行為を肯定する見方が，4年生になるといっそう顕著になる。それにつれて3年生の子どもたちの示した肯定観の根拠も明かになってくる。

資料aからは，「人間における嘘がなぜつかれるのか」について理解することができる。まず第一に，“大臣の位を落とされ，役人をやめさせられる”などという生活権をおびやかされる不安からと，“他人からよく見られよう”とする人情肯定の立場をとる回答でほとんど占められる。前者は子どもの現実的思考と，後者は子どもの心情本意とうかがえる。前者が「もし～したら～になる」という仮想の推定による不安であるのを見れば，両者いずれも心情本意の思考というべきであろう。

また，特記すべきことは，それらの発想が流される心情ではなしに，嘘をつくという行為が抵抗の心情として把握されかかっていることである。“恥をかくので”“思われるのがいやで”“知られたくなかったし，自分でも思いたくなかった”“わざわざ”などときわめて微妙な心情の内面に立ちいってきていることである。すなわち，不可抗力的行為として嘘をとらえ，その立場心情の許容という発達が見届けられる[3]。

b 相互感情への強い関心と理解が中心

資料bを眺めてみると「小さい子ども」の行為を否定する見方が中心的である。1年生から3年生までの子どもたちは，一部少数をのぞいてほとんどの子が，“小さな子はえらい”“正直だ”“勇気がある”と，賞讃していたことと比較すると，この学年ではまったく正反対の傾向をとっていることがわかる。

4年生ともなると，登場人物の大人たちがなぜそのような不可解な言動をとったのか，について，その立場，心情そのものに立ち入って考えることができるようになるのであろう。資料によると，大人たち（登場人物）をして，そうさせたものは人間感情「不安・面子・恥・虚栄」であったのだ，という発見である。ところが，登場人物の「小さな子ども」は，“きげんをとることなど考えなかった”“小さくて何もわからなかった”“話をあわ

せようという気がなかった”“大人には言えることと言えないことのあることを知らなかった”“子どもは先のことを考えられない”のであるから“しょうがない子”であり，“わるい子”“だめな子”と評定したのであろう。

すなわち，人間と人間とのあいだに交差する感情のやりとりの理解——人間相互の感情の摂取——の問題について，きわめて強い理解を示しはじめている実態をうかがい知ることができる。

ある一方の人のみの感情表出ではなく，同時に片方の人も，それに伴なう感情を表出させていることの理解である。相互感情要因には，この「はだかの王様」では例えば「嘘」「恥」「思わく」「面子」「虚栄」などがあげれられる。

このような人間感情の理解摂取が可能になるまでに，その思考・感情世界の発達がともなってきているのが，4年生段階と見ていい。

c　相互感情の概念化は未発達である

4年生の子どもたちのとらえかかっている相互感情が，どのようなパターンのものであるか，について考えようとしてきたとき，目に触れた大きな特徴は，その把握がきわめて直感的であってまだ概念化されていないということがあげられる[4]。

「王様は自分も知っていて，そのまま行列をやめてもあとで，“おっちょこちょいの王様”と言われて変なうわさがたつので，せめて自分だけでも知らん顔をしていれば，行列をやめないよりは変なうわさが立たないと思って，行列を続けた。」

大変に冗長的であることが目につく。ひとことで言えば，「面子（あるいは体面）」と言葉化されることを，なぜこのようにくどくどと，まわりくどく書いてしまうのか。このことは，資料のa～cのすべてにわたって指摘することができる。と言うのも，子どもたちがつかまえかかった感情と，それを言葉におきかえて概念化する過程に，まだ抵抗を覚えるのであろう。すなわち，子どもたち自身において感情の分化がおこなわれていないために，言葉として自分の感情が概念化されてこない。感情の計量化からその概念化の過程において未発達性があるがために，記述において冗長的になったのであろう。このような感情の未分化性，あるいは感情の概念化の未発達性が完全な発達をとげるのは，6年生の後期になってからである。

6.　登場人物の行為に対して批判や対策を示しはじめる5年生

〔資料a〕

- 自分がばかで役に向いていない，と思われたくなかったから。本当はうそをついているのがいやだったのだろう。私だったらやっぱり見えると言った。
- ばか者や役に立たないものになるのはいやなので，やめたくなかったのだろう。ばか者でも本当のことを言えばよい。
- 役にたたない，と思われたくないと言うのは皆おなじだと思うが，よく王様でありながら悪がしこい男のうそにひっかかったものだ。王様だから少しいいくすりになったのではないか。
- 何も見えないことをほかの人に気づかれたくなかったから，また，ばか者になりたくないからだまされていた。行列をやめるわけにいかないのなら，はじめから見えないと言ったほうがよかった。
- いまやめると，はたおりが悪いのをみとめたことになる。またたくさんのお金を使ってやる大行列を，と中でやめたりしたら損をするから。ぼくならすぐやめてはたおりをつかまえる。
- 王様なので，自分の失敗をみとめるのがいやだったのだろう。
- 自分が王様だというほこりを持っていた。

〔考察〕

5年生全体を通して受ける印象は，その反応が「批判的視点」から出されていることが特徴的である。一見すると3年生段階での「二者択一的絶対観」であるように思えるが，資料を厳密に読んでみると，必らずしもそうでないことがわかる。次の例を参照されたい。

(ア)　何も見えないことを他の人に気づかれたくなかっ

た。またばかものになりたくなかったからだまされていたのだ。

(イ) だまされてもうそをついているほうがもっとわるいのではないか。

(ア)では，4年生の子どもたちが強い関心を示していた人間の相互感情の摂取への理解と，不可抗力的立場を肯定する人情肯定観が見届けられる。にもかかわらず，すぐに「うそをついているほうがもっとわるい」という反応が出ている。他の例でも，「私だったら，やっぱり」「〜だろうが」「〜なのなら」という反発の姿勢が見られる。

4年生の子どもたちの示した反応は，(ア)に代表されるものであって，大人たちがなぜそのような言動をとったのか，について関心を示すものであった。それにもかかわらず5年生で(イ)のような批判が多く出ているということでは，どう考えたらいいのか。しかもそれは，(ア)+(イ)というスタイルでの反応が多い。このことは，次の6年生と対比させて考えてみなければ結論は出せないが，少なくとも5年生が4年生以下の段階へと逆発達するものとは考えられない。

(ア)の反応のあとに(イ)の反応が続くということは，そのような人間の相互感情（恥・面子・おもわく等）そのものを，今度は客観視するものの見方へと変容をとげてきたからではないのか。相互感情の理解と言う段階にとっぷりとつかっているのが4年生であるとするならば，とっぷりとつかっている中から足を抜き出して外へ出，その感情を眺めてみようとしているのが，5年生の段階であるように思う。このように考えてくると5年生の子どもたちの感想を「現実的かつ社会的立場に立つものの見方」とおさえることができよう。それは，

(1) 「私だったら……」という現実的立場に立つ考え方。

(2) 「〜したほうがよかった」という対策を示す考え方。

(3) 「王様なので」のような社会的役割を重視する考え方。

の三タイプの方向の眺め方が目についた。なお，一例ではあったが，“自分が王様であるという誇りを持っていたからだ”のように，人間の相互感情を「誇り」という言葉で概念化していこうとするとらえ方も，目についた。ただし，これは5年生ではきわめて例外であった。

7. 相互感情の概念化と社会的立場役割りの判断ができるようになる6年生

〔資料a〕

- 悪い男の言葉にのせられた／そんな人達は見栄ばかりだ／見えないことにこだわっている人／うそもほうべんというけれど／子どもはおせじを知らない／つられずに言うべきである／見栄っぱりの大人とちがう／まだ純粋で大人のようによごれていない／おおじょうぎわがわるいと言われたくないからである／しょうがないいじっぱりやである／大人の世界や自分のくらいを考えたから／途中で行列をやめるにはプライドが許さない／恥かしくて王様としての格が落ちるから／うわべだけを気にしている人たち。

〔資料b〕

- だれだって大ばか者や役に立たない者と言われるのはいやですが，この場合は，本当に王様のことを思う家来だったなら本当のことを言うべきである。それが本当の家来だ。家来には家来の立場があるのだ。
- 王様というのは政治をとっていかなければならない役目だから，王様なら王様らしく自分の思ったとおりのことを疑わずに言ったほうがいい。
- 何事も，もっともっと判断しなければこれから王様としていろいろな問題も失敗してしまう。私ならそんな行動はとりたくない。
- 町と言えばいくら見てもせいぜい200人以上いるはずだ。その人たちがみんな見えないものを見えると言ったのだから大笑いです。
- ここで本当と気がついたのだから，みんなの前であやまる態度も必要です。
- 見たとおりのことをはっきり言わない王様こそ，王様の役目に向かないバカ者だ。王様として失格だ。ふさわしくない。
- ぼくは，このような王様はやめてしまったほうがいい

と思ったけれど，たいていは自分の利益を考えてしまう人の多いのが現実だ。

・いくらばか者だと思われるのがいやでも，実際のことを報告しなければいけないし，王様もけらいを信用しているのだから，やはりうそはいけない。

〔考察〕

a　相互感情の概念化がすすむ

資料aを，4年生の反応と比較しながら眺めてみると，その質の違いが明かである。

ア　4年生の反応

なぜ見えると言ったかというと，自分が大ばか者とか役に向いていないということを知られたくなかったし，自分でも思いたくなかった。他の人が見えたんだから見えないと恥をかくので，見えると言った。

イ　6年生の反応

見えないことにこだわっている人

見栄っぱりだ

4年生の子どもたちが，くどくどと長ったらしく述べていることを，6年生の子どもたちは，「こだわり」「見栄」と，いとも簡単にかたずけてしまっている。と言うのも，この時期になると感情の分化がおこなわれ，自分がつかまえた感情の概念化（言葉化）がおこなわれるからであろう。相互感情そのものを理解することに深い関心を示していた段階から発達して，6年生ともなると自分の感情を言葉で概念化する。感情と言葉との結びつきがきわめて容易になってきたからと考えていい。この傾向は，4年生で1名，5年生で2名（いずれも1学級について）であったことを思えば，この学年の顕著な発達とみていい。この学年の特徴として目についた「感情と言葉との結びつき」の問題は，すべてのパターンの感情の概念化がこの学年で容易になってきたということではない。あくまでも，人間相互の感情の摂取の問題に関して，この傾向が見られたということである。

b　“判断”ができるようになってきた——社会的立場を重視する判断——

資料bの感想は，5年生で「批判・対策」タイプの発想として見てきた反応と同じである。5年生では，その反応が，3年生のような二者択一絶対観の方向へと逆もどりしているような印象をうけたが，5年生から6年生への発達の過程として見ると，6年生のこの段階へとつながってくる発達的特徴として考えられる。

資料bの反応の特徴は，一言でいうと，主として「社会的立場・役割」を重んずるきわめて現実的なものの見方である。相互感情の理解や，不可抗力的立場の許容観は，もちろん身につけている。ただし4年生の子どもたちの段階のように，その理解にのみとどまっているのではなく，人情肯定は人情肯定としておさえておく。その上に立って，この場の状況処理として，最も望ましいの何かと考えていく。そしてそこに，社会的立場・役割という問題を持ち出してきて，判断の対象としたのであろう。

資料を例にとりながら，その特徴について考察してみる。

・だれだって大バカ者や役に立ないものと言われるのはいやですが——

① 王様のことを思うけらいだったら本当のことを言うべきだ。（べきの論理）

② 町といえばいくら見てもせいぜい200人以上いるはずだ。（はずの論理）

③ 見たとおりのことをはっきり言わない王様こそ，王様として失格。（限定の論理）

④ 王様は政治をとっていかなければならない役目だから。（義務の論理）

⑤ たいていは自分の利益を考えてしまう人の多いのが現実だ。（現実論）

⑥ 本当と気づいたのだからみんなの前であやまる態度も必要。（態度論）

↓　　＜だから＞

・何事ももっともっと判断しなければ，これから王様としていろいろな問題も失敗してしまう。私ならそんな行動はとりたくない。

登場人物の立場や心情の理解から始まって，不可抗力的極限状況を認めるという人情肯定の発想は，いずれの子どもも持っている。ただ,そこにとどまっていないで，現実的発想を投入するところに特徴がある。

その現実的思考の特徴は，さきの資料でも明かのように，つとめて論理的である。「～すべきである。」という“べき論”すなわち断定をくだす例。道理やことわりを追求する“はずの論”も見える。さらに,“限定”“義務”を強烈に主張する思考も目につく。人情の世界は人情の世界として一応おいておき，現実的態度として具体的にはどうあるべきかを，“大臣や王様の職責”という観点から改めて追求していっている。

すなわち大臣の心情（生活権がかかっている・他人からよく思われたい）と，王様から依頼された大臣として果たすべき立場の二点を対等に見すえて，この場の状況処理として最もあるべき姿はいずれなりや，と考え一つの望ましいと思われる立場を指摘しているものである。この子どもたちは「断判」ということが，すでにできるまでに成長をとげているものと思われる。（この6年生の時期に現われた「判断」という認識が，いつ可能になったのかという問題は，改めて調査する必要がある。）

8. 結　び

人間相互の感情の摂取という問題の理解が小学生において，どのような発達的特徴をとるものか。このことについて本稿で明らかになったことは，次のことである。

1. 1年生から2年生にかけては，登場人物の感情のやりとりについての関心は，あまり働かない。自分と登場人物とが一体となってしまう生活感情の投入かあるいは登場人物間の“見る目・見られる目”を強く意識する二者関係におけるものの見方が中心である。
2. 3年生としての大きな特徴は，登場人物間の立場や心情をとらえるときに，“よいか，わるいか”という二者択一的絶対感情を投入してしまうことであった。何が彼をそうさせてしまったのか，を考える視点は，まだ持っていない。ただし一部の子どもにおいて，人物間に交差する感情やあるいは立場等を肯定する人情肯定観の芽生えは見られた。
3. 4年生になると，登場人物の行為心情を肯定するものの見方が中心をしめる。すなわち，登場人物間の相互に交差する人間感情の摂取理解に大変強い興味を示すからであろう。ただし，感情の計量とその概念化の過程において，未発達なところがあるために，きわめて直観的かつ冗長的把握が特徴である。
4. 5・6年生の特徴は，4年生における未発達が成熟をとげていくところにある。まず，相互感情そのものを客観視していこうとする現実的思考が中心になり，登場人物に対して立場や役割・義務などを強く要求しだす。そして判断・対策・態度を強烈に主張する。というのも，4年生の欠点であった相互感情の概念化がおこなわれるからであろう。感情の分化という問題が，この段階で見られる。

注

1. 悪に陥る人間の許容に到る発達的特徴「読書科学」Vol.17, No.2
2. この点は，前掲論文で追求したものである。
3. 前掲論文は，ここまでの児童の発想を扱った。
4. 4年生がとらえた人間の相互感情の実態（未発表論文）

SUMMARY

204 elementary school children in grades 1 through 6 were asked three questions after they read the story of *The Emperor's New Clothes*. The first and second-grade children were told the story by their teacher. The questions were:

(1) Why did the minister, the officers, the emperor and the people not say what they saw? what do you think about it?

(2) Why did the little boy shout that the emperor was naked? What do you think about it?

(3) Why did the emperor continue to parade even though he realized that he was naked? What do you think about it?

The content of the children's responses was analyzed and interpreted for each grade level. The first and second-grade children were not interested in the interpersonal feelings of the characters in the story. Only superficial comments were given. The second-graders began to understand mutual feelings based on the consciousness of the opposite person, such as "A realized he was seen by B. So, A acted that way." The characteristics of the third-graders' responses were in a good-or-bad dichotomy. The fourth-graders were interested in understanding the mutual feelings among the characters. The fifth-graders began to express criticism and countermeasures to the characters' actions. Opinions of the sixth-graders were based on an understanding of the social role of the characters.

知能障害を伴なった常習交通違反少年の読書療法的接近について

―読書療法の症例研究 No.15―

千葉家庭裁判所*

大　神　貞　男**

Ⅰ　目　　的

本報告は，知能障害（限界級）を伴なった常習交通違反少年に，読書療法による治療的接近をした事例研究である。その研究目的は，

1.　常習交通違反少年の交通違反の心理機制と，その治療上の目標を，いかに治療的立場から理解したらよいか。

2.　以上の様にして措定された，常習交通違反者の交通違反という特殊な形態の非行行動が，読書療法によって治療効果を治め，その行動が消去されるかどうか。

3.　心理療法は一般に，心因障害者に対する治療方法であって，生来性の人格障害者の治療方法としては限界が大きいものと考えられている。そこで，本例の様な限界級の非行少年に，読書療法を実施した場合の治療効果は，どの様な結果を示すか。

おおよそ，以上の様な事項を，本報告において，事例研究として明にしてみたいと思う。

Ⅱ　ケースの概要

1.　少年　H

1.　生年月日　昭和26年7月14日

2.　学　　歴　昭和42年3月　中卒

3.　職　　業　運送店の運転手

2.　非　行　歴

1.　昭和41年10月26日　交通違反

2.　昭和42年4月28日　交通違反

3.　昭和43年2月15日　窃　　盗

4.　昭和43年2月22日　交通違反

5.　昭和43年7月1日　交通違反

6.　昭和44年1月21日　交通違反

3.　本件の非行

1.　昭和44年4月22日　自動車修理工場から自動車のナンバープレート2枚を窃取

2.　昭和44年4月5日　駐車中の乗用車内より，カーステレオ1台と，ほか4点を窃取

3.　昭和44年5月30日　家出の上，普通自動車の無免許運転

4.　昭和44年4月　駐車中の普通乗用車内より，ステレオパック5個を窃取

5.　昭和44年4月　駐車中の普通乗用車内より，ステレオパック3個を窃取

4.　家　　庭

1.　実父（50才）農業　小卒

2.　実母（51才）農業　小卒

3.　姉　（22才）電話局勤務　高校卒

4.　兄　（20才）農業　　高校卒

(1)　父は元来，少年の出生当時は馬車引きをしていたが，少年が小学校に入学頃から農地を買い広め，農業に専念する様になった。

---

*　A bibliotherapeutic approach to repeated motor vehicle violations by a mentally retarded youth.

**　OKAMI, Sadao(Chiba Court of Family Affairs)

(2) 父は無口な性格で，口数は少いが，反面気性は荒く，短気で興奮型である。家庭内でも，命令的，支配的な態度が強く暴力的な傾向がある。(下記の親子関係診断テストの結果を参照)

(3) 母と少年との愛情関係は，こまやかであるが，未分化で依存的な愛情状態に固着している。

5. 心理テスト結果

1. 知能　田研式中学知能　IQ＝60
　　WAIS(個別診断)　IQ＝72
　　判定　限界級知能障害。
2. クレペリン　CF
3. Y—Gテスト

D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
2	4	3	3	2	2	3	3	1	4	3	2

4. 親子関係診断テスト　(父)　パーセンタイル

消極拒否	積極拒否	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
5	70	30	95	65	75	40	70	35	30

6. 生活史の概要

1. 昭和26年7月14日に出生。安産。熟産。母乳十分。発育は順調なるも，両親は共稼ぎで，母は授乳，排便のしつけは十分でなく，離乳は2歳。また小学校卒業の頃まで，母に添寝をされていた。
2. 昭和33年4月小学校に入学。両親共稼ぎのため，家庭の教育は放任的。親のいいつけには，服従的ではなかった。
3. 昭和39年4月中学校に入学。欠席は学年が進むとともに増加。体育は学級代表，学習成績は下位。
4. 昭和42年3月中学を卒業。就職をしたけれども，2年間に6回転職し，平均在職年数は4か月にすぎない。
5. 非行時は家出中で，石油店や運送店で働いていた。

7. 診断上の問題点と治療目標の設定

1. 本例は上記の心理テスト結果の様に，知能は限界級と考えられる。限界級児は知能の発達障害とともに，性格障害が付随するものと考えられている。
2. 生活史と，親子関係診断テストの結果に見られる様に，母との愛情関係が固着して，その愛情状態は，依存的で未分化なものである。

　父の態度は，厳格で拒否的で，かつ干渉的であり，母との間の態度に矛盾や不一致が多い。

3. この様な基礎的な家族的人間関係においては，少年の人格は発達遅滞を示し，非行化の要因となりやすい。
4. 非行歴および，本件の非行において明らかな様に，少年の非行は，車非行および車の窃盗である。いわば，常習交通違反と自動車盗の非行類型の少年である。
5. この様な，常習交通違反や自動車盗の心理的機制はどの様に理解され，また，その治療目標はいかに考えられたらよいか。
6. このことについて，最近の内外の学者の見解を概観すると，

　A) パーソンズ，Tは若者文化説 (youth culture theory) を説え，若者文化は，成人男性の役割と対照的で，その行動が無責任を特徴とし，その形成過程を，息子と家族関係，とくに父親との人間関係において見出せるとしている。すなわち，父親との接触が乏しく，母親同一視が強いが，青年期になって，男性的抗議 (masculine protest) をとり，子供っぽく女らしいことに反抗しようとする。

　しかも，その所属する社会階層は，中流階級に多いが，労働者階級である場合には，無免許運転，自動車盗，または，攻撃的な非行行動となると論じている。

　B) ギブロンス，D. C. は，最近の犯罪を9類型に分類し，そのうちに，自動車盗なる類型を設定している。かれは，その自動車盗なる概念について，「自動車を盗んで利益を得ようとするのではなく，リクリエーションとして，乗るために盗み，乗り捨てるのである。彼等は，自分を非行少年と見てはおらず，自動車窃盗をクールで，たくましいと考えている。

　経済的に恵まれた，中流階層に多く，父親が息子に

対し，成人としての男性的行動のモデルになっていないことが見受けられると主張している[1]。

C）このことを最も端的な見解として表明しているものに，日本犯罪学会理事の森武夫がいる。かれは，東京家庭裁判所の交通事件鑑別の作業の中から，次の様に論じている。

「なるほど，事故の原因としては，今日は親と喧嘩をしてきたとか，そう言う家庭のトラブルが，入り込むことは，直接には少いけれども，しかしながら，彼等は，何故そんなに，車に執着するかと言うことの中には，多分に父親と仲が悪いと言うことで，車に逃避する。つまり，ドライブとか，そう言うものに興味をもつ。そして親との葛藤から逃げだすという形のものが多い。間接的に，運転の中に攻撃的要素が入りこむことは分っています。」[2]

ところで，本件の事例の少年Hは，父親との間に愛情障害が相当に顕著であり，同一視の形成は不十分である。そしてまた，その非行の類型は，交通違反および自動車盗（本件ではその部品盗であるが）で常習化の域にあるものである。

それで，この様な常習交通違反や，自動車盗の非行の心理機制の理解のためには，上記の諸学者の見解は，きわめて示唆に富んでいると言いうる。

そこで，本例の少年の治療目標も，仮説的に，父親同一視の形成を治療目標として，治療を進め，その結果を検討することにした。

Ⅲ　治療経過の概況

1. 治療期間　昭和44年7月11日より，11月17日まで129日間
2. 面接回数　9回
3. 用いた読み物

　　ローリングス「仔鹿物語」

　　ルナール　　「にんじん」

4. 経過の要約

(1) 7月28日および，8月4日の2回の治療面接の結果。父親の言うところによると，生活態度は安定しつつあるけれども，読書意欲が全然なく，読書は全然していないよし。

(2) 8月11日および26日の面接結果。どうやら少年が導入読書に入った。面接時の読後感を要約すると，「仔鹿物語は40ページまで読みましたが，本は大分面白かった。ジョディーと言う少年が，いたずらをするので，母さんはうるさいと言うが，父の方は相当に話しが分っていると思った。父はよく，ジョディーの気持を理解しているし，いいお父さんだ。よく気持が分る。お父さんは，ジョディー思いで，よくかわいがる。ジョディーが悪いことをしても，よく反省させて，その反省が分る様になったら，それを許してやった。

母はジョディーを叱るけれども，本心から叱るのではなくて，ふざけていると言う感じだ。クマ退治に行く時なんか，食べ物がなくて，自分のパンを切って，父さんとジョディーに入れてやったりして，大変よいと思った。母は家の中のことをいろいろとして，ジョディーや父を大切にすると思った。狩に行く時なんかちゃんと用意をしてやった。ジョディーに一寸，きびしいところもあるけど，それにしても少し甘いところもある。

ジョディーと父は，すごく気があって，狩にも一緒に行って，ゆずりあう気持だ。ジョディーの家庭は，みんなが助け合っていて，楽しいだろうと思った。そんな様に，皆なが助け合う様な，家庭に一寸なってみたいと思った。

本を読むのが面白くなって，毎日，20分位，読んでいる。本を読みだしてから，少し気持が変わった様に思う。いくらか字も読める様になったし，気持もいくらか変わってきました。以前は気持がイライラしていましたが，それが，本を読み出してから，イライラしない様になりました。」

(3) 9月1日および9月8日の面接結果。

ジョディーの父が，毒ヘビにかまれて死にかかった。それでジョディーは，一晩中寝ずに看病をした。医者

は死ぬかも分らぬと言った。一晩すぎたが，大丈夫，助かった。母が死ななくてよかったと言った。死んだら大変だと言って，それを，ジョディーが聞いて，普段の母と違って，大変に，優しいお母さんであっていいなあと思った。

ジョディーが，朝食をすまして，お父さんのベットのところに行って，お父さんが，ヘビにかみつかれた時，メジカを殺したのを覚えているかと言った。お父さんは，ジョディーに忘れるものか，おれの命の恩人だと言った。

ジョディーは，お父さん思いで，父さんが死にかかったので，ジョディーは医者を迎えに行って，助けた。また，父は死にかかっているのに，ジョディーのことを大変心配して，死んでも大丈夫な様にやってやりたいと思って大変に，いいお父さんだった。

ジョディーの母も，少しきびしいところもあるけど，本当に，優しい，いいお母さんだと思った。

本を読むのは，始めのうちは，イヤだったけれども，途中から面白くなった。ジョディーの家庭は，みんなが助すけ合って生活をしているので，いいなあと思った。みんなが，助け合っているので，家の中が面白くたのしい。こんな家庭がよいと思う。

(4) 9月24日の面接結果の要約。

父が，ヘビにかまれて，ジョディーが，仔鹿を探しに行って，つかまえてきて，一番さきにつかまえた人に，仔鹿はなつくと聞いていたので，抱いてみた。そして段々とならして，ジョディーが，仕事に行く時も，遊びに行く時も，ついて来る様になった。

大神　「こんなジョディーをどう思いますか。」

少年　「仔鹿をかわいがって，自分の子供の様にかわいがって，大変いいなあと思った」

大神　「ジョディーのお父さんはどう思いますか」

少年　「大変よい。お父さんは，ジョディー思いで，ジョディーの言うことなんか，筋道が通った話しをしている。心が，親子の間に通じ合っている。」

大神　「この家庭は」

少年　「今は一寸苦しい。イロイロ苦しい。父が病気だし，大変だなあと思う。しかし，みんな力を合わせて仕事をしたり，いろいろなことを助け合っている」

大神　「本を読みだしてから，何か，君の気持に変ったことはありませんか」

少年　「今まで友人と遊んでばかりいたのが，余り遊ばなくなって，また，余り口も聞かなくなった。また，家庭でも前と変わって，みんなが面白くやっている。わたくしも，良く仕事をしだしたので，父も気持がよくなって，よく話をしかけて来る様になった。本を読みだしてから，父との仲が良くなった。この頃は，一寸，人にイヤなことを言われても，頭に来なくなった。一寸やそっとの事は，がまんができる様になった。毎日，本のことが頭に入ってしまうので，もう喧嘩なんかしなくなりました。本を読んでよかったと思います。

ジョディーが，父や母に仔鹿を殺されたので，両親に反抗をして，家出をした。それで，何日も家に帰ってこず，父母は心配して家で待っていた。もう何日でも，帰って来なかったら，家をうつることになっていた。その一寸前にジョディーが帰ってきた。ジョディーはお父さんの姿を見て，かけだして行った。父から何も食べていないだろうと言われて，ジョディーは，夢中で食べた。それで家出をして苦しいことが分った。それで，ジョディーはまた一歩大人になった。そして，父や母に，これまでは子供あつかいにされていたが，これからは一人前の大人あつかいにしようと，父に言われた。

ジョディーは，父や母に言われたことは，一つも間違ったことはないと気がつい た。それで，家をとび出して，父や母の言うことに反対したのは間違いだったことが分った。」

(5)このあと，11月17日に最終面接をしている。この間に，少年は，「にんじん」を読了して，かなり詳細な感想文が記載されているのであるが，治療は，「仔鹿物語」で，事実上，終結の段階にきていると思われるので省略する。

Ⅳ 結果の考察

1. 通常，交通違反少年の再教育方法としては，交通法規や，運転技術の教育や再教育が重要視されており，またその原因論としては，ドライバーの身体的機能や条件，心身の協応動作，または職業適性という側面が強調されているようである。

2. ところで，本事例は，上記の見解と異なって，常習交通違反少年の，心理的メカニズムは，家庭内人間関係，わけても，父親との同一視形成の不全にあることを示している。

3. それで，常習交通違反少年の治療は，父親との愛情障害を解消し，かつ，父に対する同一視の形成によって接近しうることを示している。

4. したがってまた，治療のために用いる読み物も，日本読書学会編集の適書目録で十分で，交通違反少年用の特別の治療読み物を用いずとも治療的接近が可能である。

5. それで，以上の様に論じてくると，常習交通違反少年の治療理論も，一般の非行少年の治療理論も，同質のものであると言える。

6. 以上の事項は，下記の事実によってこれを論証することができる。

(1) 仔鹿物語の読後感に表現された，少年の人格変容過程。

(2) また，読後感に示された，少年と父を中心とした家庭内愛情関係の改善的変化。および少年の行動の変容。

(3) 予後を追跡してみるに，少年の交通違反という行動は，治療終結後，昭和45年11月18日に，無免許運転が1回あったにすぎず，これは，本件の非行時より1年7か月間再非行がなかったことを示している。またその再非行後本報告書作成の，昭和46年8月16日まで，その後再非行はない。これによって，読書療法的接近によって，少年の人格発達と改善はかなり大きく，常習性の交通犯罪性人格は消失し，1回あった再非行は，偶発性の再非行と考えても差支えない様である。

(4) また下記の様に，心理テストによって，少年の人格変容と，父親との人間関係改善のあとが，客観的に測定できる。

Y—G

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
昭和44年7月28日	2	4	2	3	2	2	3	3	1	4	3	2
昭和44年11月11日	2	2	2	2	2	3	2	3	2	4	3	3

親子関係診断関係テスト（父）

	消極拒否	積極拒否	厳格	期待	干渉	不安	溺愛	盲従	矛盾	不一致
昭和44年7月28日	5	70	30	95	65	75	40	70	35	30
昭和44年11月11日	40	75	80	99	95	90	70	95	85	70
改善値	+35	+5	+50	+4	+30	+15	+30	+25	+50	+40

(イ) 全体を通じて，治療による父子間の人間関係の改善値は相当に大きいと言える。

(ロ) またしたがって，父親の態度は殆んど問題がなくなっている。

(ハ) 同時に，両親間の教育態度の矛盾や不一致も解消していることが分かる。

(5) 以上の，テスト結果および，予後調査や，読後感に見られる少年の人格変容から，この様な限界級知能障害児の心理療法——(この場合は読書療法であるが)一的接近によって，人格の発達的改善を伴う，治療効果を確認することができると思われる。(昭和46年8月16日)

注 1. 高橋雅春 非行少年の類型

2. 東京家庭裁判所 ケース研究 124号

SUMMARY

Teaching of traffic rules and retraining of driving skills have been emphasized in the re-education of youth with repeated traffic violations. Their ontogenesis has mainly been attributed to their physical functions and conditions, their psycho-motor coordination and their vocational aptitudes.

An eighteen year-old truck driver who was sent to a Court of Family Affairs because of repeated traffic violations, as well as stealing things from cars, was tested and investigated. His WAIS I. O. score was 72. His father was regarded as a short-tempered, easily excited, controlling, and a violent type of person. His father's responses to the *Diagnostic Inventory of Parent-Child Relationships* indicated that he was severe and rejecting in his attitude toward his children; and that there was a big difference between the mother's and the father's principles for training their children. The cause of the boy's crime behavior apparently stemmed from unhappy relationships among his family members, especially between his father and himself.

A bibliotherapeutic approach was used in the re-education and treatment of this boy, for a period of 129 days. He was assigned to read *The Yearling* dy M. K. Rawlings; to write a book report and bring it to the Court when he wes interviewed. Nine interviews were held during the treatment period.

His father reported that he did not read at all for the first three weeks. In the interview of the sixth week, the boy reported that he had begun to read the story, and that he had found it interesting. In the seventh-week interview, his report showed that he began to think about the relationships among the family members in the story. In the tenth-week interview the boy told about his own family in contrast to the family in the story. He realized that the father and the son in the story loved each other, although the father occasionally seemed too severe and the son was opposed to his father. He said "My family is all happy recently. Since I started to work hard, my father often speaks to me."

Although the boy was assigned to read *Toil de Carotte* by J. Renard after *The Yearling* the correction of his underlying psychological problem seemed to be completed when he finished reading *The Yearling*. The change in his father's attitudes toward him was reflected in his Inventory responses after the therapy. The boy committed only one traffic violation and there were no reported incidents of stealing during a two year period following the bibliotherapy.

会　　報　(1974年4月～1974年12月)

常任理事会（4月15日）

出席　倉沢会長　望月副会長　岡本　阪本　滑川　福沢　増田各常任理事

欠席　出雲路　室伏各常任理事

(1)　役員改選の件

選挙管理委員会から，前号会報記載の通り役員選挙当選者の報告があった。このほか会則第11条により，会長指名で岡本奎六，滑川道夫両氏が常任理事に就任することが承認された。

(2)　役員の事務分掌の件

編集委員会　室伏（主査）　増田

研究委員会　岡本（主査）　福沢　出雲路

庶務委員会　阪本（主査）　滑川

(3)　委員依嘱の件

会員湊吉正氏を研究委員，同高木和子氏を編集委員に依嘱することがきまった。

(4)　会則・諸規約の検討の件

実情にあわなくなってきたものの改正原案を作ることが，阪本・室伏・増田の三常任理事の小委員会に依嘱された。

(5)　ＩＲＡの件

5月1～4日にアメリカのニューオルリーンズ市で開かれる第19回ＩＲＡ年次大会に阪本敬彦常任理事が参加するので，日本読書学会の代表として公式行事に出席することを承認した。同氏は5月3日，“Reading of Preshool Children in Japan”の題で報告を行う予定。

(6)　第5回国際読書学会議の件

日本代表団の団長に滑川道夫氏，副団長に倉沢栄吉氏と望月久貴氏をお願いすることがきまった。

公開研究会（5月25日）

午後2時より東京教育大学Ｅ館156号室で開催。講師村石昭三氏，司会福沢周亮氏。主題「幼児の読みと基礎能力。」

公開研究会（6月22日）

午後2時より東京教育大学Ｅ館156号室で開催。講師江藤文夫氏（成蹊大学），司会佐藤泰正氏。主題「読書と映像。」

常任理事会（6月22日）

出席　倉沢会長　望月副会長　滑川　増田　室伏各常任理事

欠席　出雲路　岡本　阪本　福沢各常任理事

(1)　第5回国際読書学会議の件

現在のところ72名の申しこみがあった。これをＡ・Ｂの2班に分け，団長と世話役をきめた。

(2)　機関誌刊行の件

原稿が不足しているので，理事の協力を要請する。

(3)　第18回研究大会の件

11月16—17日，私学会館で行うことに決定。

(4)　賛助会員獲得の件

教科書会社に入会をすすめる。理事が分担して交渉にあたる。

公開研究会（7月6日）

午後2時より東京教育大学Ｅ館156号室で開催，講師堀川直義氏（成城大学），司会室伏武氏。主題「読書とコミュニケーション」

常任理事会（7月6日）

出席　望月副会長　出雲路　岡本　滑川　増田　室伏各常任理事。

欠席　倉沢会長　阪本　福沢各常任理事

(1)　第5回国際読書学会議の件

日本代表団の旅行の詳細について検討した

第5回国際読書学会議

(1)　代表団出発（8月10日）

下記のメンバーが団体として出発した。(敬称略)

Aコース

生田　洋子	石井　和子	出雲路　猛
磯野　恭子	磯野　文子	岩崎　礼子
大村　はま	小口　崇博	加賀美秋子
金子百合子	金子　洋一	川端　律子
木下紀美子	小林　国雄	最首　隆子
阪本　浩子	白神　信江	白倉　丘
高木　育子	土谷　とく	西村　漱子
原　昌一	広野　昭甫	舟茂　俊雄
別府　久子	星野みゆき	増田　信一
村石　昭三	望月　久貴	安居　総子
山下スミエ	山花　郁子	山本　晴雄
横島　章	横山　養子	

Bコース

荒木　久子	有沢俊太郎	伊藤みつ子
糸川欣一郎	井上　繁	岩坪　昭子
遠藤　邦夫	笠原　良郎	梶矢　文昭
柏木　勇夫	倉沢　栄吉	黒田　千麻
黒田　俊子	桑原　隆	桜本　喜徳
佐々木　孝	首藤　久義	首藤　文江
白岩　健二	竹内　実次	多田　昭子
長井志津子	滑川　道夫	橋見千恵子
浜中　重信	府川源一郎	福永　久子
降旗　重徳	松島　春子	水野　裕夫
山本　光江	吉田　節子	吉田　豊

(2)　ウィーン到着（8月11日）

ここでアメリカから直行した阪本敬彦常任理事と往路別行動の高木和子会員が合流。ほかに独自の旅程で参加した牧田清志，平賀増美両会員も会議に参加した。

(3)　第5回国際読書学会議（8月12～14日）

ウィーンのホフブルグ宮で開催。36か国から千人を越える参加者があった。地元オーストリア，アメリカについで，日本は大代表団を送りこんだことになる。IRAとしては今回はじめて英語と日本語の間に同時通訳が採用された。

日本からの発表者と題目は次の通り。

村石昭三氏　"Orthography and Reading"
滑川道夫氏　"Children's Literature and Reading"
阪本敬彦氏　"Reading Instruction in Japan."
牧田清志氏　"Neurological Aspects of Learning to Read"

(4)　視察（8月15～25日）

ウィーン会議のあと，Aコースはハイデルブルグ，ボン経由，Bコースはジュネーブ，マドリード経由でロンドンで合流し，さらにパリへ向かい，各地で視察を行なった。

(5)　デンマーク読書学会主催国際会議（8月26日）

コペンハーゲンで同学会（会長モーエンス・ヤンセン博士）の歓迎を受けた。2つの学校を参観したほか，夕刻には講演と夕食の会が開かれ，滑川道夫，阪本敬彦両氏の講演のあと，学校の家庭科の先生を中心にして作られた料理を，女子生徒のサービスでごちそうになった。

(6)　帰国（8月27日）

全員無事に帰国した。

常任理事会（9月9日）

出席　倉沢会長　望月副会長　岡本　阪本　滑川　室伏　各常任理事

欠席　出雲路　福沢　増田各常任理事

(1)　機関誌刊行の件

18巻1・2合併号（通巻67・68合併号，49年9月30日付）は校正中。18巻3号，4号については原稿が不足している。

(2)　刊行助成金の件

昭和48年12月7日付で文部省に申請した学術定期刊行物刊行費の申請については，昭和50年5月30日付で却下された旨通知があった。

(3)　第18回研究大会の件

11月16・17日に開催を予定しているが，他に適当な会場がないので，東京教育大学に交渉することになった。テーマ，シンポジウム，講演などについて討議が行われた。

(4)　研究委員，編集委員に常任理事会に出席を依頼の件

今後常任理事会に湊吉正研究委員，高木和子編集委員にオブザーバーとして出席することを依頼することになった。

公開研究会（9月28日）

午後2時より東京教育大学E館156号室で開催。講師金平聖之助氏（小学館），司会滑川道夫氏。主題「英米における児童向きペーパーバックと読書。」

常任理事会（9月28日）

出席　望月副会長　岡本　阪本　滑川　室伏各常任理事
　　湊　高木各委員

欠席　倉沢会長　出雲路　福沢　増田各常任理事

(1) 本年度読書科学賞の件

読書科学研究奨励賞に嶋路和夫氏を決定。読書科学賞は該当なしと決定。なお読書科学賞委員会を設置して，規程の改正や選考を依嘱することがきまった。

常任理事会（10月19日）

出席　倉沢会長　岡本　阪本　増田　室伏各常任理事
　　湊　高木各委員

欠席　望月副会長　出雲路　滑川　福沢各常任理事

(1) 機関誌刊行の件

第18巻1・2合併号は10月21日納本の予定。同巻3号と4号の原稿は揃っていない。

(2) 賛助会員獲得の件

倉沢会長のお世話で教科書会社3社（光村図書，教育出版，東京書籍）が賛助会員として入会した。

(3) ニュースレター創刊の件

会員と学会を結びニュースレターを創刊したい旨倉沢会長から提案があり，これを可決した。

(4) 読書科学賞委員会の件

9月28日の常任理事会で設置することがきまったこの委員会は，会長指名により，その構成を，阪本名誉会長滑川前会長，倉沢会長，望月副会長，阪本事務局長，編集担当理事から一名，研究担当理事から一名，地方の会員から一名の計8名とすることが承認された。

(5) 昭和48年度決算報告，昭和49年度予算案の件

下記の事務局の報告および提案の通り承認され，11月16日の理事会と総会にかけられることになった。

昭和48年度決算報告

収入	1,911,100円	
内訳	くりこし金	19,681円
	会費	1,074,100円
	賛助会費	660,000円
	売上金	129,500円
	印税	20,714円
	利子	7,105円
支出	1,908,489円	
内訳	機関誌出版配布費	962,852円
	人件費	361,150円
	通信費・交通費	82,510円
	印刷費・消耗品費	78,280円
	本部運営費	121,559円
	公開研究会費	60,680円
	第17回研究大会補助金	241,458円
差引	2,611円	

第17回研究大会決算報告

収入	509,458円	
内訳	参会費	243,500円
	懇親会費	12,000円
	資料集売上金	12,500円
	本部より補助金	241,458円
支出	509,458円	
内訳	大会案内印刷費	61,540円
	プログラム印刷費	35,000円
	資料集印刷費	93,000円
	その他印刷費	3,730円
	案内・プログラム送料	107,770円
	発送アルバイト代	37,100円
	当日アルバイト代	20,800円
	名札作製費	35,000円
	講師謝金	25,000円
	懇親会費	60,060円
	理事会費	11,000円

	会合費・弁当代	10,000円
	交通費・運搬費	5,037円
	文具費	3,925円
	雑費	496円
差引	0円	

昭和49年度予算

収入	2,024,611円	
内訳	くりこし金	2,611円
	会費	1,000,000円
	賛助会費	900,000円
	売上金	120,000円
	利子	2,000円
支出	2,024,611円	
内訳	機関誌出版配布費	1,200,000円
	人件費	420,000円
	通信費・交通費	80,000円
	印刷費・消耗品費	90,000円
	本部運営費	70,000円
	公開研究会費	64,000円
	第18回研究大会補助金	100,000円
	雑費	2,611円
差引	0円	

公開研究会（10月2日）

午後2時より東京教育大学E館273号室で開催。講師興水実氏，司会岡本奎六氏。主題「学習スタイルを生かした国語教育。」

日本読書学会第18回研究大会

主　催　日本読書学会

後　援　文部省・東京都教育委員会

と　き　11月16日(土)～17日(日)2日間

ところ　東京教育大学

11月16日(土)

正　午　理事会

午　後　G502号室

1：00　総　会

2：00　シンポジウム「読書研究の新しい視点」

発言者　東京成徳短期大学　滑川　道夫

東　海　大　学　牧田　清志

国立国語研究所　村石　昭三

野間教育研究所　阪本　敬彦

司　会　東京学芸大学　望月　久貴

5：00　懇親会

11月17日(日)

午　前　G502号室　司会　出雲路　猛

10：00　幼稚園における言語指導――読み聞かせ等の実験研究――　成城大学　岡本　奎六

10：20　現代っ子における読むことと考えること　大阪市立弁天小学校　岩坪　昭子

10：40　読書の学校教育と社会教育における役割とその接点の分析　埼玉県立浦和図書館　楮本　良平

11：00　子どもの読書歴の分析　東京学芸大学附属大泉中学校　増田　信一

11：20　高校生の読書様態と創造的読書への歩み　広島県立福山商業高等学校　橋高　洋一

11：40　質疑と討論

指定討論者

東京都新宿区立四谷第一中学校　今村　秀夫

大阪市立東淀工業高等学校　尾原　淳夫

午　前　G201号室　司会　佐藤　泰正

10：00　読書療法の症例第23報――症例報告と症例分析を通じてみた読書療法の一般治療過程について――　三育学院短期大学　大神　貞男

10：20　情報処理能力の構造について　亜細亜大学　室伏　武

10：40　批判的思考と読解　東京学芸大学　井上　尚美

11：00　絵本のおもしろさの分析(2)　神戸大学　沢田　瑞也

○東京成徳短期大学　高木　和子

東京教育大学　小林　幸子

東京教育大学　田代　康子

11：20　幼児の絵本に対する反応調査(2)

神戸大学　沢田　瑞也

東京成徳短期大学　高木　和子

東京教育大学　小林　幸子

○東京教育大学　田代　康子

11：40　質疑と討論

指定討論者

国立特殊教育総合研究所　岡田　明

東京教育大学　福沢　周亮

午　後　G502号室

2：00　講演「新聞の読み方」

日本経済新聞社社会部長　黒羽　亮一

昭和49年度理事会（11月16日）

出席　倉沢会長　望月副会長　出雲路　岡本　阪本　滑川　福沢　室伏各常任理事　大神　岡田　尾原各理事　山本監事

欠席　増田常任理事　今村　大村　輿水　佐藤　野地　深川　椋　村石各理事

議事　下記の総会の議事と同じ。いずれも提案または報告のとおり可決した。

日本読書学会昭和49年度総会

Ⅰ　議長選出　尾原淳夫理事を議長に選出した。

Ⅱ　会長あいさつ　倉沢栄吉会長

Ⅲ　議　事

(1)　昭和48年度事業報告　室伏武常任理事

(2)　昭和48年度決算報告　阪本敬彦常任理事

(3)　監査報告　山本晴雄監事

(4)　昭和49年度事業計画案　室伏武常任理事

(5)　昭和49年度予算案　阪本敬彦常任理事

(6)　その他

Ⅳ　第8回読書科学賞授賞式

(1)　選考報告　室伏武常任理事

(2)　授賞　倉沢栄吉会長

第8回読書科学賞

読書科学研究奨励賞　嶋路和夫殿

あなたは本学会機関誌「読書科学」の第47号から第66号に至る誌上に「長編文学の読書指導」に関する一連の論文を発表されました。これらはいずれも読書の科学的研究の今後に寄与するところ大なるものがあります。その業績に対してここに読書科学研究奨励賞を贈り表彰いたします。

昭和49年11月16日

日本読書学会理事長　倉沢　栄吉

公開研究会（12月7日）

午後2時より東京教育大学E館156号室で開催。講師大村はま氏（大田区立石川台中学校），司会倉沢栄吉氏。主題「実践報告・読書指導」

訂　正

読書科学第17巻2号48ページ（阪本一郎氏論文）左欄19行め，「代せ」は「代せ」の誤りでした。おわびして訂正いたします。　（日本読書学会編集委員会）

「読書科学」編集規程

1. 本誌は，日本読書学会の機関誌であって，1年1巻として，4回（3，6，9，12月）発行する。
2. 本誌は，原則として本会の会員の読書科学に関する論文の発表にあてる。
3. 本誌は，原著論文，実践報告，シンポジュム，展望，資料，文献紹介，学会情報，会務報告などの欄を設ける。
4. 原稿は，未だ他に公刊されないものに限る。
5. 原稿は，編集委員会の選考を経て掲載する。また，原稿に添削を加えることがある。ただし，大きな変更は，執筆者と相談する。
6. 印刷の体裁は，編集委員会に一任する。
7. 図・表など，特に費用を要するものは，執筆者の負担とする。
8. 原稿執筆者には，掲載誌10部を贈呈する。
9. 本誌に掲載された論文は，無断で複製あるいは転載することを禁ずる。
10. 本誌の編集事務についての通信は，日本読書学会編集委員会（〒112 東京都文京区音羽2—12—21 野間教育研究所内）あてとすること。

「読書科学」執筆要項

1. 論文の長さは，原則として400字詰原稿用紙30枚までとする。
2. 原稿は，横書きとし，提出後訂正を要しないように字句内容を明確にすること。
3. 叙述は，論文にふさわしく，簡潔にし，図・表など最少限にとどめ，本文と図・表の無意味な重複をさけること。
4. 図は，そのまま製版できるように，半透明の用紙に黒インクで書くこと。
5. 主要な用語，外国の人名，地名などの固有名詞は，原語を初出のときだけに付けること。
6. 数字は，算用数字を用いること。
7. 原稿には，要約を200字以内に付すること。
8. 引用文献は，論文の最後に，アルファベット順に一括して付すること。
   文献の記述形式は，次のようにすること。
   a 単行書
   著者　書名　出版社　出版年　ページの指示
   b 編さん書中の論文
   著者　論題名（著(編)者　書名　出版社　出版年　ページの指示）
   c 雑誌記事
   著者　論題名　誌名　巻　号　ページの指示　年　月　日（注，外国雑誌名は，イタリックの指示をすること）
9. 論題，所属，氏名の英文を付すること。
10. 原著論文については，英文の要約を600語以内に付すること。
    英文の要約は，次のようにする。
    a 白紙に，1行おきにタイプする。
    b 必ず邦訳を添えること。
    c 英文に熟達した人の校閲を経ていること。
11. 原稿は日本読書学会編集委員会（〒112 東京都文京区音羽2—12—21 野間教育研究所内）あてに送付すること。

Vol. 18, No. 3 December, 1974

昭和四十九年十二月三十日発行（年四回発行）

THE SCIENCE OF READING

Published by The Japanese Society for the Science of Reading
c/o Noma Institute of Educational Research
Kodansha, Otowa, Bunkyo-ku, Tokyo, Japan.

President: Eikichi Kurasawa **President-elect:** Hisataka Mochizuki

EDITORS

Takahiko Sakamoto Kazuko Takagi Shinichi Masuda
Takeshi Murofushi John Downing Donald Leton

CONTENTS

Original Articles

Two early Japanese children's newspaper comic strips : "Sho-chan and "Zuku Kozo"……*SAKAMOTO, Ichiro*……59

An analysis of children's attitudes based on seventh-grade students' written report on their reading experiences……*MASUDA, Shinichi*……69

Development of understanding mutual feelings among the characters in "The Emperor's New Clothes in elementary level……*MATSUBARA, Shunichi*……76

A bibliotherapeutic approach to repeated motor vehicle violations by a mentally retarded youth……*OKAMI, Sadao*……86

Official Notes ……56

第18巻 第 3 号

＜通巻 第69号＞

昭和49年12月30日 発行

会員頒布

編　　集　日本読書学会編集委員会
発 行 人　阪　本　一　郎
発 行 所　日 本 読 書 学 会
〒112
東京都文京区音羽2—12—21
野間教育研究所内
振替東京3213番

印刷・第一印刷株式会社